新制女子國語讀本 卷八

4b
810
大12

42193
教科書文庫
4
810
42-1923
20000
65487

東海道五十三次の内（上）川崎（下）土山　（歌川廣重筆）

資料室

46
810
大12

文部省檢定濟

大正十二年一月二十七日　高等女學校國語科用

新制女子國語讀本

開成館編輯所編

株式會社東京開成館藏版

広島大學
教
65487
図書

新制女子國語讀本 卷八

目次

一 ウォシントン會議劈頭の光景……（萬朝報）……一
二 愛國心の鼓吹……高島平三郎……一六
三 第二の誕生……南部修太郎……二一
四 修道院へ……幸田露伴……二七
五 長谷寺まうで……池田鐵子……三三
六 藝術と家庭生活……萩野由之……三七
七 樂翁と日本外史……佐々木信綱……四三
八 野村望東尼……土井晩翠……四七
九 日本の女性（詩）……

一〇 母たるべきために……三宅やす子……四九
一一 息女への教訓（候文）……烏丸光廣……五三
一二 病院……大町桂月……五八
一三 正月と詩歌……與謝野晶子……六三
一四 生活の深化……吉田絃二郎……六八
一五 名門の最後……高山樗牛……七一
一六 忘れがたき日……姉崎嘲風……七七
一七 今様五題（今様）……八一
一八 新島守 その一……（増鏡）……八三
一九 新島守 その二……（増鏡）……八八
二〇 古調新調（俳句）……九三
二一 玉勝間抄……本居宣長……九七
一 ふみ讀むことのたとへ……九七
二 富み榮えを願はざること……九七

三 書うつし物書くこと……九八
四 手かくこと……一〇〇
五 物知り人の物の理を論ずるやう……一〇一
二二 順禮唄（淨瑠璃）……近松半二……一〇一
二三 落花の雪……（太平記）……一〇八
二四 東海道五十三次……笹川臨風……一一三
二五 新古今集の歌（和歌）……一一九
二六 錦祥女 その一（淨瑠璃）……近松門左衛門……一二三
二七 錦祥女 その二……一三一
二八 徒然草抄……吉田兼好……一三六
一 折節のうつりかはり……一三六
二 猫また……一三九
三 聖海上人……一四一
四 人の心……一四二

五　花と月……一四三
二九　新生活の開幕……生方敏郎……一四四
三〇　女をよめる歌（和歌）……一四七

自修文

一　攝政……一
二　ワーテルロー（詩）……バイロン……六
三　ひとひ（和歌）……一三
四　神幸院……（女性）……一三
五　男女の分業……野上俊夫……一九
六　窓邊の春（詩）……生田春月……二三

新制女子國語讀本　卷八

一　ウォシントン會議劈頭の光景

全世界の各國民が待ちに待つてゐたウォシントン會議（Washington）は、いよいよ汎アメリカ館に於て開かれた。

各國の代表はそれ〴〵定めの席に着く。間もなく、米國國務卿ヒューズ（Hughes）氏は起立して、

「これから牧師の祈禱があります。」

と宣告する。

「全智全能の神！」

力強いベース（Bass）の聲が、肅然たる堂内の隅々にまで響く。

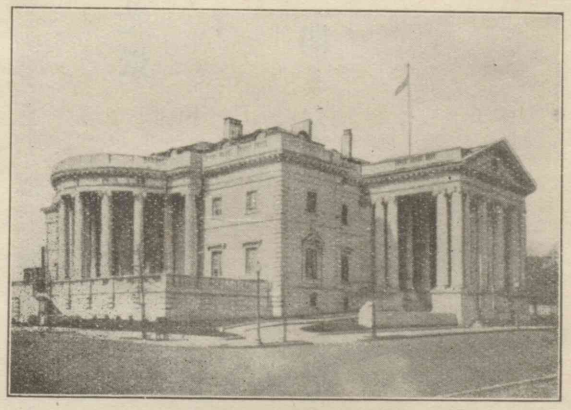
「願はくは、我等をして明白に總べてを考へしむる力を與へ給へ。公平に判斷し、賢明に行動せしめ給へ。自らの利害のみを顧みることなくして、我等の義務と責任とを果させ給へ。この禍多き世界を救ふべく、新たなる力を與へ給へ。……」

三千人に垂んとする會衆は、悉く嚴肅な氣分に打たれて、等しく頭を垂れた。

ヒ氏は再び起ち上つた。そして簡單に、

「米國大統領。」

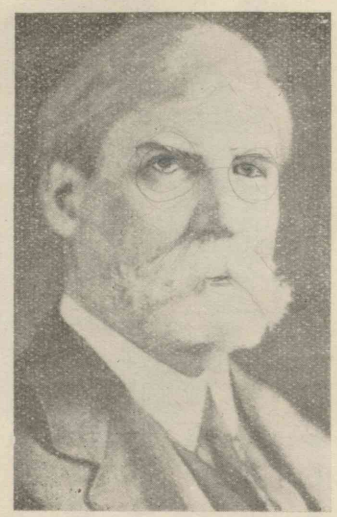
と指名した。ハーディング氏は起立した。會場も破れるばかりの拍手が續く。大統領は愛敬よくお辞儀して、そして鼻眼鏡をかけて、草稿を讀み下す。



汎アメリカ館

ハーディング（1865—）

「私はこの會合が二十世紀の文明の良心を喚起した美しい會合であることを心から信ずる。この會合は悔恨と悲哀との會合でなく、さりとて勝利者が最後の審判を與へる會合でもない。況や國際評議委員が世界を再建しようとする會合でもない。むしろ將來に於て、我等が一致共同以て人道に貢献すべく、國際的友誼增進の障害物を出來る限り最少限度に縮小しようとする會合であるのである。」



ヒューズ

と宣言する。

ハ氏の聲は最初の程こそやゝ振はない感があつたが、段々進むに從つて勢力を增し、右手を擧げて演説する態度は實に練達したも

のだ。特にその一節に於て、「私は公式としては米國政府を代表して演説するに過ぎないけれども、我等の背後には、軍備の縮小と戰爭の絶滅とを希うて止まない國民を有する。」といふあたりから「米國は本會議に清淨な心を以て臨み、何等の私心をも挾まず、何等の假想敵をも設けず、また自國だけの捷利を豫期せず、たゞ各國とともに專心以て美しく且崇高な平和の實現に努力しようと思ふのである。」と述べる頃には、階上傍聽席の両院議員達は、手を拍き床を踏んで喝采し、ハ氏は暫時立往生するの止むを得ぬに至つた。かくて演説が終ると、ハ氏は直ちに退場した。

やがて、英國代表バルフォーア氏*は起立して、

「國際上の禮儀及び慣習として、この種會合の議長は當然招待主側から選出すべきものである。」

と論じ、更に、

バルフォーア (Balfour) (1848-)

「特にその力量・識見・經驗・人格を兼備する米國國務卿は、この大責任を擔うて起つべく最も適當な人と信ずる。私はこゝに僭越ながら各國を代表して、ヒューズ氏の議長就任を希望する。」

と述べるや、ヒ氏は雷のやうな拍手に迎へられて起立し、

「私はこゝに諸君から與へられた特權と責任とを受けるの光榮を有します。」

と謝辞を述べた。

ハーディング

謝辞を述べたヒ氏は、型の如く閉會を宣告するだらうとは、列席の各國代表の窃かに豫期してゐたところだつた。しかるに、思ひきや、氏が依然として起立してゐようとは。そして、懷中から取出した演説草稿の優に數十枚に達するのを見るに及んで、滿場の氣分

は急に緊張して、その一語一句をも聞き洩すまいと耳を傾けた。

ヒ氏はまづ軍備縮小の必要と各國代表招待の經過とを説明して、

バルフォーア

屢〻議席の喝采を博したが、就中、

「時は既に來た。この會議は單に決議し、普遍的に勸告を試みるものでなくて、正に實行すべきものである。」

と力強く叫んだ一瞬間こそ、眞にこの日の氏の演説のクライマックス(Climax)であり、また會議を動かすべき鍵だつた。

ヒ氏の演説は刻一刻と白熱化していく。故意か偶然か、海軍縮小の細目を提議するに及んで、その顏の我が日本代表席に面してゐたのは皮肉だつた。

「今後十箇年間に亘り、主力艦隊の建造中止を提議する。」

といひ、次いで、

「米國はこのため目下建造中の主力艦隊一切を破壞する。」

と述べた時、さながら掌の割れるやうな勢で拍手する老紳士があつた。何ぞ知らん、これこそ平和主義宣傳者として盛名のあるブライ*(Bryan)アン氏その人であらうとは。カナ(Canada)ダ代表ボーデン氏の後側には、ジュ*(Jutland)ット(Borden)ランド沖海戰の勇將ビティ(Beatty)提督が席を占めてゐる。金モール(Mogol)の美しい提督の双腕は堅く交叉され、その鋭い眼光はぢつとヒ氏の口元を凝視してゐる。

加藤友三郎

「日本に對しては、陸奥・土佐・加賀の破壞を……」

ブライアン(1860—)

ジュットランド沖　デンマークの沖。

と、ヒ氏の口から怪しい日本語の發音が洩れ出る頃、記者席の邦人はどや〳〵と電信局指して走る。加*藤海相は頻りに某教授の通譯を聞き取つてゐる。徳*川公も首を動かし頭を搔き、時々じろりじろりと眼鏡を光らせて天井を眺める。幣*原大使は一心に演說を傾聽してゐる。上*田大佐はにこにこしながら加*藤寛治中將の顏を見る。高*尾總領事は演說の要領を書き取つてゐる。

徳川家達

ヒ氏の投じた外交的爆彈は、確かに會場に漲つてゐた重苦しい疑惑の雲を一掃するに十分だつた。自國にとつて利益であるか不利益であるか、一瞬間はそれさへも忘れたかのやうに、人々の感情は興奮した。主力艦隊破壞……十箇年間の製艦休止……この二箇

加藤海相　名は友三郎。
徳川公　公爵徳川家達
幣原大使　名は喜重郎。
上田大佐　海軍大佐上田良武。
加藤寛治　海軍中將。
高尾總領事　名は亨。

の爆彈の響は、ヒ氏の最後に述べた陸軍縮小と極東問題とを人々の腦裡から拂ひ去つた觀があつた。

ヒ氏の演說が終るや、場内は再び騷然たる拍手の巷と化した。

「*ブリアン！　ブリアン！」

ブリアン

と階上の両院議員席から高く〳〵叫ばれた。ブリアン氏は起ち上つた。引締つた唇の上を蔽ふ嚴しい髭と、メス*のやうな鋭い光の眼とを持つブ氏は、爽かなフランス語で、

「佛國は諸君と同じく、『軍備を葬れ。』と叫ぶに躊躇しない。」

と述べて着席する。

階上の聲は更にその勢を增して、

ブリアン　佛國首相。

「日本々々。」「德川々々。」「トークガーハ！」「日本々々。」

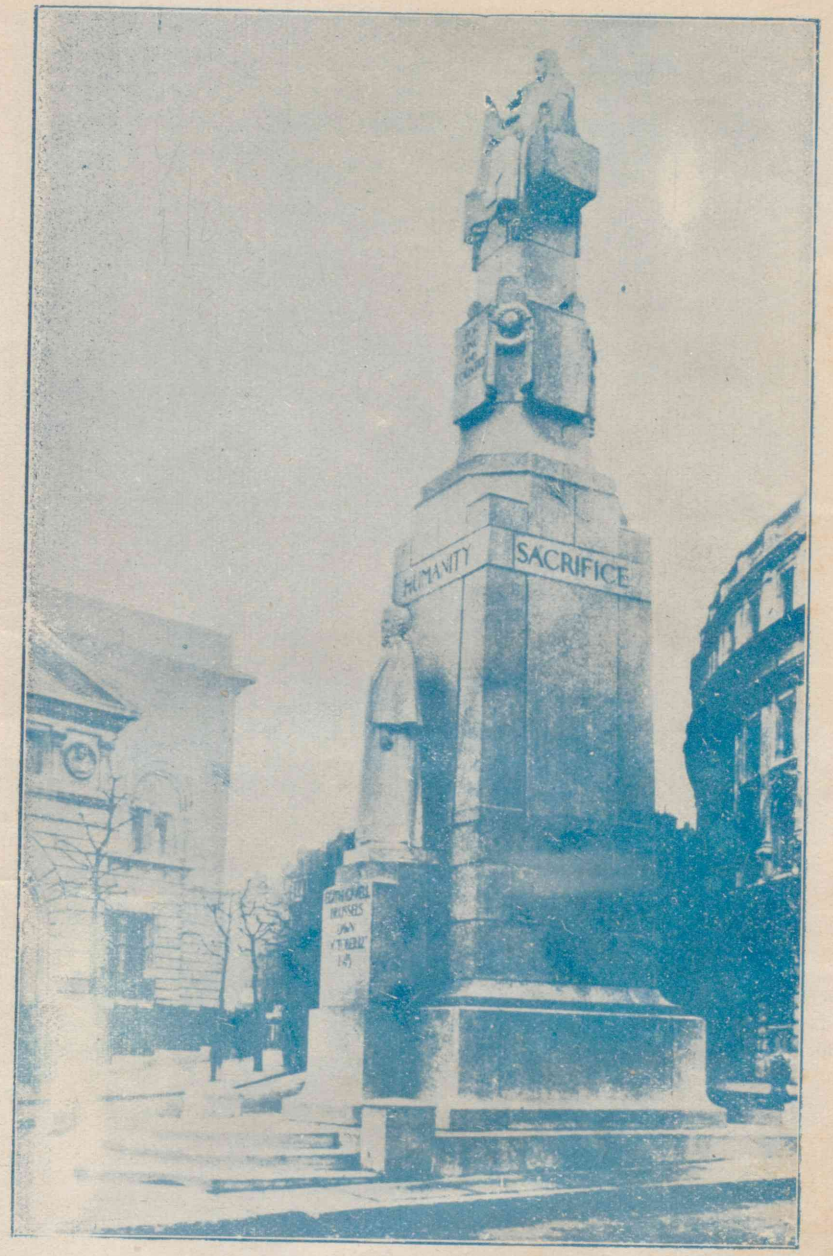
とまち〳〵に叫ぶ。割れるやうな拍手は再び各方面に湧く。德川公はやをら內懷から演說の草稿を取出して、左手で眼鏡を取去つた。副大統領席にゐる眼鏡がけの一貴女は、好奇の眼を日東の君子の面上に注ぐ。大統領ハーディング氏夫人である。

「委員長並に紳士・淑女諸君！」

德川公のやゝ舌縺れのするやうな、しかも謠曲の地聲を有つ、底力のあるイギリス流の英語は、堂の隅々にまで響き渡る。公は時々左右を顧みながら意見を述べ、

「世界は平和を欲する、世界は政治と經濟との基礎の鞏固になることを求めてゐる。この叫に應じて、識見・力量ともに非凡な委員長指導の下に、最終の目的に到達することは、日本の最も光榮とし愉快とするところである。」

義會ントシオウ



カヴェル女史の碑

〳〵と結んだ。

更に、イタリー(Italy)・中華民國・ベルギー(Belgium)・オランダ(Holland)・ポルトガル(Portugal)諸國の各代表は、傍聽席の聲に促されて、それ〴〵その希望を披瀝した。傍聽席の議員達の聲は、遂にその同僚で且代表の頭目たるロッヂ(Lodge)氏の演説を要請した。

ロ氏は起立した。人々は國際聯盟を一蹴し、*ウィルソン(wilson)氏をして病床の人とならせたこの老鬪士が、今將に投じようとする第二の爆彈に多大の期待と興味とを抱いてゐた。けれども、彼ロ氏は、共和黨首領として、上院に於て十年一日の如く繰返してゐる言葉を、何等の表情もなく決然と言ひ放つた。

「私はこゝに閉會の動議を提出します」。

かくて記憶すべき第一回軍備制限總會は、千九百二十一年十一月十二日、時計の針が恰も午後零時三十分を指した時、その閉會を告

*ウィルソン　前米國大統領(1856—)

げたのだつた。

二　愛國心の皷吹

結論

理論的根據

目下世界の各國民は、辛うじて戰爭の慘禍を脱し得たるのみ、否、未だこれを脱し得ざる國民すらありて、速に經濟的狀況の恢復せんことを希ひ、若しくは生活的安定を得んとするの外、また餘事を顧みるの遑なしと雖も、この戰爭の結果、各國に於て、愛國心の頗る熱烈に皷吹せられつゝあるは、大いに注意すべき事實なり。

開戰當時、ベルギーにありて、獨軍のために英國の間諜として殺害せられしエヂス、カヴェル女史の碑銘には、愛國の語未だ盡さず。」と誌されたり。英國一雜誌の寄書家は、最近この語を捉へて論題となし、「戰後の新世界に於て、各國民に要求せらるゝところのものは正にこの語なり。」といへり。論者の意は、明かに廣き意義の愛國心

即ち博愛主義を皷吹するにあるも、「博愛主義は强き愛國心より生ず。而してこの主義はまづ同人種間に行はれざるべからず。」といへるに見て、いかに愛國主義の必要を承認しつゝあるかを知るに足るべし。往年、英國炭坑夫の恐るべき罷業問題が、三角同盟以外の他の部分に同情を得る能はざりしは、愛國の立場より彼等の行動を不穩當なりと認めたればなり。大戰爭に際して國難に殉じたるもの、たゞ一のカヴェル女史に止らず、その事例は恐らく枚擧に遑あらざるべし。從來最も强き愛國心を有すと稱せられたる我が國民は、大戰爭勃發以來、此等各國民の愛國心强き事實に接し、寧ろ慚愧の念を禁じ得ざるものあり。加之、戰後各國に於ける諸般の事實に遭遇して、各國民が益〻極端なる愛國主義に走りつゝあるに驚愕せざる能はざるなり。各國民が國外に對して唱へつゝあるところは、博愛主義なり、人道主義なり。しかも、國內に於ては

往年　西暦千九百二十一年。

三角同盟　炭坑夫・鐵道從業員・運送從業者の同盟

盛に愛國主義を奬勵しつゝあり。何が故に然るか。蓋し國家は國民の强固なる團結なくしては、各人の生活が甚しく脅かされんとするのみならず、かゝる脅威は、戰前の世界に於けるよりも、戰後の新世界に於て、一層痛切に感ぜられつゝあるがためなり。戰後のヨーロッパ大陸を見よ、*ラテン民族は互に相結託し、*スラヴ民族もまた同盟を作り、所謂民族自決のために、異民族間の軋轢益〻猛烈となりつゝあり。而してたゞに政治問題のみならず、經濟上若しくは食糧上にも、同民族間に自給の策を講じつゝあり。こゝに於てか、「愛國の語未だ盡さず」の碑銘の頗る有意義なるを感ず。

我が國民もまた、戰爭以來、歐洲諸國の宣傳によつて、甚しく博愛主義・人道主義に傾きつゝあり。これもとより咎むべきにあらざるのみならず、博愛主義は古來邦人の誇とするところなれども、これがため毫も愛國主義を拋棄するの必要なし。邦人中には、愛國主

*ラテン民族　フランス・イタリー・スペイン・ポルトガルなどの國民。

*スラヴ民族　ロシヤ・ポーランド・ブルガリヤ・セルヴィヤなどの國民。

義は軍國主義を意味すとなし、今日の新世界に通用せざる主義なりと思惟するものあるも、愛國主義なくして存在し得る國家なく、虐げられざる民族なし。*ショーヴィニズムの語を造り出したる佛國民、ジンゴイズムの語を使用し初めたる英國民は、今なほこれをその特性となしつゝあるは爭ふべからざる事實なり。今後幾百年を經て今日を回顧するに當り、戰爭のためにいかなる變化を生じたりと認むるか明かならざらんも、平和と人道とのためなりと稱せられたる大戰爭は、確かに各國民をして益〻愛國心の必要を覺らしめたるに過ぎざるなり。今後世界の距離は益〻短縮せらるべく、横濱と桑港との距離は、長崎と上海との如くに接近し、東京北京間の往復時間は、今の東京・大阪間に要するが如きそれに短縮せらるゝことあるべし。これがため、國際上いかなる變化を來すべきか。恐らく各國間の競爭を益〻猛烈ならしむるに過ぎざるべし。

*ショーヴィニズム　ショーヴィンの唱道した愛國的侵略主義をいふ。

各國民は經濟上の發展のためにも常に愛國心を要す。而して經濟問題の解決に對しては、現に新しき意義の愛國心を要求しつゝあり。國民たるもの須らく猛省せざるべからず。（萬朝報）

三　第二の誕生

高島平三郎

男女ともに、何等の心配もなく無邪氣に小鳥のやうに飛び廻り歌ひ廻る少年・少女の時代から、物心のつく青春期に移り替る頃には、身體にも、精神にも、いろ〳〵の變化が起り動搖が生じて、時には非常に悶え苦しむことさへもある。

一般に人はこの時期を經て、いはゆる自覺の域に入るのだから、學者はこの時を名づけて「心の嵐」といひ、またこの嵐を經て新生活に入る時を「第二の誕生」と呼んでゐる。第一の誕生の時には、自分を生むところの母親が非常に苦しむのであるが、第二の誕生の時には、己自らがその苦みを體驗せねばならない。

人はいつも安心して同じ生活を繰返してゐることが出來、それが何等不足の感を伴はない時ほど、愉快・幸福を覺えることはないだらう。けれども、自己の內部に變動が起つて來て、同じ生活を繰返すに堪へられなくなつたり、または外部の事情が變つて來て、そのまゝ安心してゐられなくなると、種々の衝動が起り刺戟が生じ、精神が動搖して安定を缺き、そこに迷も悶も起り、到底ぢつとしてゐることが出來ないやうになる。人生の危期は正にこの時である。

しかし、この時期は、同時にまた、人がその一生涯に於て最も花やかに躍進する時であるから、古來青年時代を「人生の春」とも「人生の花」ともいひ來つてゐる。要するに、すべての進歩は變化から來、その變化には多少の不安と危險との伴ふことを免れない。しからば、この時代に於ける精神の動搖はいかなる狀態で現れるかといふ

高島平三郎　廣島縣の人、心理學者、東洋大學及び日本女子大學校教授。

心の嵐　Mental storm.

第二の誕生　Secondary birth.

に、それは人によつて違ふが、一般には、疑惑し、批評し、反抗し、破壞する傾向の著しくなるものである。

少年・少女の頃には、先輩・長者の言は、何等の疑惑も批評もなく、これを受け入れるが、青年期に入ればなか〳〵さうはいかない。何事につけても、「何故か」といふ理窟の根據を得ないと承知しなくなる。そしてその說明が己の心に滿足を與へねば、反抗もし、また破壞もするやうになる。それは正當の發達で、喜ぶべきことではあるが、これがために、また青年自らの心に種々の動搖を來すことも少くない。若し世間の事が一定の理法によつて出來てゐれば、青年の心に滿足を與へるだらうが、實際はなか〳〵さう單純に理智一遍で解決されないから、青年の心には、矛盾を感じ、衝突を覺え、種々の疑を生じ、延いては世間に行はれてゐる道德・信仰さへも、つまらないやうに思ひ、終には自暴自棄に陷つたり、或は自己の理想と現實

の社會とがあまりに懸隔してゐるために、世を悲觀して厭世に傾いたりすることさへもあるものである。

かやうな場合に、勇猛心があり、善い指導者があり、善い境遇にあるものは、此等の煩悶・動搖に對する適當の解決を得て、安全に第二の誕生を經過するのであるが、大抵のものは、この誕生に際して、多少心に傷を負ふことを免れない。

しかし、人は青春の頃に、煩悶・動搖が全くないか、或はそれの少いものは幸福であつて、それの多いものは不幸であるかといふに、必ずしもさうと斷言することは出來ない。古の人も、「艱難汝を玉にす」といつたり、また、天の大任をこの人に下さんとするや、必ずまづその心志を苦しめ、その筋骨を勞し、その體膚を餓し、その身を空乏にし、行その爲すところに拂亂せしむ。心を動かし、性を忍び、その能くせざるところを曾益する所以なり」といつてゐる。つまり、種々

天の大任云々
天將レ降二大任於是人一也、必先苦二其心志一、勞二其筋骨一、餓二其體膚一、空二乏其身一、行拂二亂其所レ爲所一以動レ心忍レ性、曾益其所レ不レ能（孟子）

の煩悶や困難に逢ふ人は、精神も身體もともに鍛錬されて、そこに進歩を見るのである。それゆゑ、青年期に種々の打擊を受けることがあつても、決して失望し落膽しまたは自暴自棄することなく、徐ろにその嵐の經過し去るのを待つべきである。

中にも、婦人は家にあつて両親の手厚い保護を受け、外面からの刺戟に直接することが少く、平和に幸福に育つのであるが、一旦他家に嫁いで、夫に事へ舅姑に事へるやうになると、急に外面から種々の煩悶・苦勞が襲ふので、精神の烈しい動乱を覺える。しかし、かやうな苦しい經驗をしてこそ始めて自覺が出來るのだから、人の母として出産の苦痛を經驗しない前に、自分の第二の誕生の苦痛に堪へねばならない。

およそ人が眞の自覺を得れば、すべての見聞が新しくなり、從來の苦痛も却つて現在の快樂となり、全く別世界に入つたやうにさへ

なるものである。宗教上の「救はれ」といひ「悟り」といふことも、この煩悶・動搖の後の狀態に名づけたものである。たゞし、宗教上の場合には、その煩悶が信仰にあることはいふまでもない。

要するに、青年男女の心の容易に動搖するのは、人生の心的經過の必然の現象であるから、これに對して毫も狼狽することなく、適當な指導の下に、眞の自覺に達して、人生の最も深い意義を體驗するやうに心掛けるべきである。

四　修道院へ

南部修太郎

船は靜かに函館の舊棧橋を離れた。

港の上にはまだ冷々とした朝靄が罩め渡つて、雨上りの秋空は憂はしげに暗んでゐた。騷がしい揚錨機の音、出帆の合圖の笛の響などが、その重く沈んだ朝の空氣を顫はせながら聞える。蒼黑く

修道院　北海道渡島國上磯郡當別にある、トラピストの僧院、明治二十九年開創。

南部修太郎　仙臺市の人、明治二十五年生、文學者。

濁つた海は、はかない空の明るみを波の背に映しながら、絶えず往き來する小蒸氣の蹴波に搖いでゐる。時々白い鷗の群が水を滑るやうに低く飛んで、さつと身を飜しては船の蔭に隱れ、そして、いつの間にか雪を散したやうな點になつて、遠くの波の間にふうはりと浮ぶ。荷役に忙しい樺太または釧路通ひの汽船や、白いペンキの醜く剝げた帆船の中には、舷の低い捕鯨船の疲れたやうな姿も横たはつてゐる。私の船はその間を緩かに進んでいつた。

眼に映ずるすべては、秋の音づれの速かな北國の寂しい朝の姿であつた。港を包む遠近の山の頂には、冷たい色の雲が流れて、その暗い陰影に劃られた山々の襞には、憂鬱と冷酷の色が深く刻まれてあつた。北國の旅人はその自然に對して、何等の親みも溫かみも感ずることが出來ない。時には世に背く孤高の聖者のやうに、時には荒み果てた心冷かな癈人のやうに、北國の自然は常に彼と

離れて立つてゐる。彼は孤獨を感ずる。そして、自然と人との間に近づきがたいやうな壁のあることを意識する。美しさがあつても、輝きがあつても、それは大理石の塑像のやうに、血がない、熱がない。山を仰いでも、海を眺めても、北國の旅人の心に薄るものは、常に言ひ知れぬ空虛と寂寞の感じである。私は前夜の雨に濡れた船首の甲板の上に立ちながら、そんなことを考へてゐた。

船はいつしか埠頭を遠く離れてゐた。振返ると、灰色の秋空の下に、函館の町が一目に見える。海から眺める町の感じは、どことなく異國的で、あの古めかしい鉛色の瓦屋根のないことが、日本の町らしい親みを薄くする。しかし、右手の臥牛山の中腹から、やゝ急な傾斜を作つて入り乱れてゐる家々が、流れるやうに平地の方へ擴がつてゐる地形の面白さが、私の眼を惹いた。處々に寺院の屋根や洋館の塔などが際立つて聳えてゐる。暫くさうした景色を

惹きつけられるやうに眺めてゐた私は、やがて傍の揚錨機の上に腰をおろした。そして、ぢつと眼をふさいだ。

殉教者の惱み！　私は想像の中に*トラピストの人達の生活を描いて見た。そして、それは私が彼等に對して全く見知らぬ人であるといふ點から、今そこに近づかうとしてゐる私の心持を、色々な意味に於て不安にさせた。同時に、何か不思議なものに觸れるといつたやうな好奇の念も湧かずにはゐなかつた。い

修道院

*トラピスト　Trappist　西暦千四百十年フランスに起つたキリスト舊教に屬するトラツプ教派。

づれにしても、彼等は或特殊な世界に或特殊な生活を營んでゐる人達である。嚴格な戒律の下に、一身を祈禱と沈默と勞働に捧げて、あらゆる衆愚と凡俗の世を離れた靜かな修道院の中に、自分の一生を過すといふこと、それは少くとも一つの奇蹟ともいふべき生活である。

「それが果して人間として本當の生活なのだらうか。」と、私は密かに疑つた。「神のために、たゞひたすら神のために……」と、私は心の中で繰返した。「若しそれが本當の生活であるならば、少くとも私も考へて見なければならないのだ。」と、私はまた思つた。

彼等は人から離れてゐる、あらゆる人間的の世界から隱遁してゐる、歡樂を知らない、美食を思はない、絶對に欲望を斥けてゐる。そればかりでなく、神に對して祈る聲は持つてゐても、人に對しては聲を鎖してゐる。「人は靈だけに生きる。」これを彼等は固い信條

として、あらゆる手段で自分の肉體を虐げてゐる。

「それほど人間の肉體は醜いものだらうか、それほど苛責せねばならない肉體だらうか。それならば、なぜ彼等は自殺しないのだらうか」。それは次に起つた疑であつた。

しかし、行爲の上からいへば、彼等の生活は眞に徹底した生活のやうに思はれる。そこに主義と實行の完全な一致がある。その飽くまでも靈の世界の永遠を信ずるの強きに於て、また絶間ない祈禱と瞑想によつて精神生活を充實させ、怠りない勞働によつて肉體を鞭ちながら、妄執と欲望と邪念から解脱しようとする努力に於て、私は尊ぶべきものであると思ふことが出來る。

「そして、自分は……」と、私は自ら省みた。私は自分の心の不安と生活の動搖とを思はないではゐられなかつた。そこには、自分に背き人を裏切るあらゆる虚僞があつた。淺ましい野心と嫉妬と猜

疑があつた。またそこには病み疲れた不健康な醜い欲望に穢された肉體があつた。そして、彼等と自分とを隔てゐる或物を考へた時、私は息づまるやうな氣がした。今自分の前に展けようとしてゐる一つの世界、それは或恐怖に似た感情を私の胸に呼び起した。

私は思はず我に返つた。當別の岬が漸くはつきりと行手に見え出した。

五　長谷寺まうで

幸田露伴

弓張月のやう〳〵光りて、入相の鐘の音も収る頃、西行は長谷寺に着きけるが、訪ひ驚かすべき法の友のなきにはあらねど、訪ひも寄らで、觀音堂にまゐり上りぬ。さなきだに梢透きたる樹々を嬲りて夜の嵐の誘へば、はら〳〵と散る紅葉なんどの空に狂ひて吹き

幸田露伴　名は成行、東京市の人、慶應三年生、文學博士、文學者。

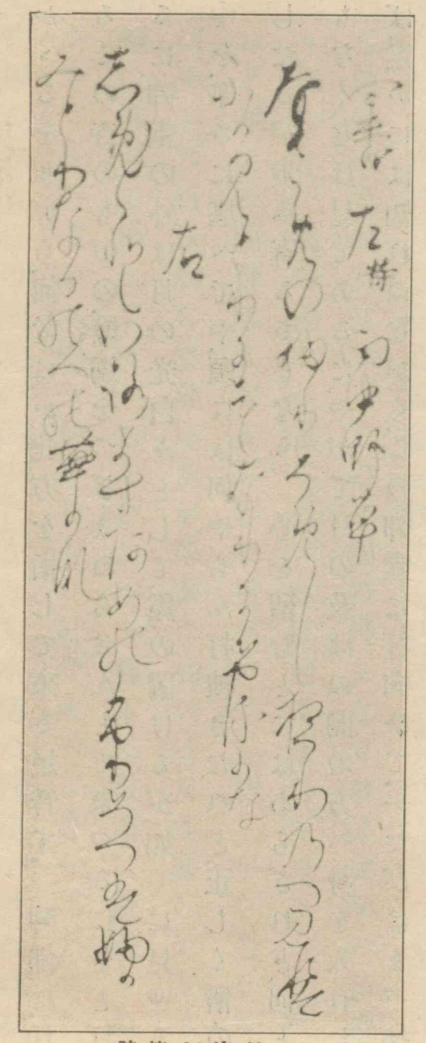
西行　俗名佐藤義清、鎌倉時代の歌僧、建久元年（一八九）歿、年七十三。

長谷寺　奈良縣磯城郡初瀬眞言宗豐山派總本山。

入れられつ、法衣の袖にかゝるもあはれに、また佛前の御燈明の瞬きしつゝ、萬般のものの黑み渡れるが中に、いと幽かなる光を放つも趣あり。法華經の品第二十五を聲低う誦するに、なんとなく平時よりは心も締りて、身に浸み渡る思のすれば、なほ誠を籠めて誦し行くに、天も靜けく、地も靜けく、人も全く靜まりたる、時といひ處といひ相應じて、我が耳に入るは我が聲ながら、若しくは隨喜佛法の鬼神などの聲を和してともに誦するかと疑はるゝまで、上なく殊勝に聞え渡りぬ。特に參りたるかひはありけり。菩薩も定めしかゝる折のかゝる所作をば善しとして、必ず納受し給ふなるべし。今宵の心の澄みきりたるこの清しさを何に比べん。あまりに有難くも尊く覺ゆれば、今宵は夜すがら、この御堂の片隅になり趺坐して、曉方になほ一度讀誦し參らせて、さてその後香華をも供して罷らんと、西行やがて三拜して御前を少し退り、影暗き一隅に

第二十五　法華經普門品第二十五卷は觀音經である。

身をねぢ据ゑ、凍れる水か枯れし木かの、動きもせねば音も立てず、寂然として坐しゐたり。夜は沈々と漸く更けて、風も睡れる如くなりぬ。右左に並びて立



西行法師筆蹟

四番左持　雨中野草
春さめのふりのそめしよりかのみどれればふりにもなりにけりるかなな

右

しろまめ〳〵とふりますあめのかみどりそへばなるふのべの草かな

ちける御燈明は、一つ消えまた一つ消えぬ。今はたゞ、いと高き吊燈籠の光朦朧として力なきが、夢の如くに殘れるのみ。この寺の僧どもは寒氣に怯ぢて、所化寮に爐をや圍みてあるらん、影だに絶

に見するものなし。いふべき方もなく靜かなれば、日比燒きたる餘氣なるべし、今薫ゆるとにはあらぬ香の、有るか無きかにおのづから匂を流すもいとよく知らる。

かゝるをりから、何者にか此方を指して來る足音す。御佛に仕ふるこの寺のものの、燈燭をつぎまゐらせんとて來つるにやと打見るに、御堂の外は月の光白々として、霜の置けるが如くに見ゆるが中を、寒さに堪へでや、頭には何やらん打被きたれど、正しく僧の形したるが歩み寄るさまなり。心を留むとにはあらざれど、何としもなくなほ見てあるに、やがて月の及ばぬ闇の方へ身を入れたれば、定かには知れぬながら、この御堂に打向ひて、一たびはまづ拜みまつり、さてしづ〳〵と上り來りぬ。御堂は狹からぬに、燈は螢ほどなり。燈の高さは高し、互の程は隔たりたり。此方を彼方は有りとも知らず、彼方を此方はよくも見得ねば、西行はたゞ我と同じ

き心の人もまた有りけるよと思ふのみにて打過ぎたり。彼方はもとより闇の中に人あることを知らざれば、何に心をおくべくもなく、御佛の前に進み出でつ。いとつゝましげにかしこまりて、數多たび合掌禮拜し、一心の誠を致すと見ゆ。

同じ菩提の道の友なり。その心操の淺まならぬは、夜深の參詣に測り得たり。衣の色さへ辨へ得ざれば、面はまして見るべくはなけれど、淨土の同行の人なるものを、呼びかけて語らばや、名をも問はばやと、西行は胸に思ひけるが、卒爾に物いはんは惡しかるべし。祈願の終つて後にこそと心をひかへて窺ふに、彼方は數珠を取出し、さや〳〵とばかり擦り初めたり。針の落つる音も聞くべきまで物靜かなる夜の御堂の眞中に在りて、水精の數珠を擦る音の亮かなる響いと冴えて神々し。御經は心に誦すとおぼしく、万籟絶えたるに、珠の音のみをたゞ緩かに響かす。その聲或は明かに、或

は幽かに、或は高く、或は低く、寢覺の枕の半ばは夢に霰の音を聞くが如く、朝霧晴れぬ池の面に菡萏の急に開くを聞くが如く、小川の水の獨り咽ぶか、雨の紫竹の友ずれか、山吹匂ふ山川の蛙鳴くかと過たれて、一聲聲中に万法あり、「皆與實相不相違背。」と、いとをかしくも聞きなさるれば、西行感に入つてありけるが、期したるほどのことは仕果てしにや、その人數珠を収めて、御佛をば禮拜すること數多たびしつ、やをら身を起して退らんとす。

菩提の善友、淨土の同行、契をこの上に結ばんには、今こそ言葉をかくべけれと、

思ひ入りて擦る數珠の音の聲澄みて
おぼえずたまる我がなみだかな

と、歌の調は好かれ惡しかれ、西行俄に詠みかくれば、彼方は始めて人あるを知り、思ひがけぬに驚きしが、「何と仰せられしぞ、今一たび。」

と、心を押鎭めて問ひ返す。聞きとりかねけんと猜するまゝ、「思ひ入りて擦る數珠の音の聲澄みて。」と復び言へば、後は言はせず、「君におはせしよ、こはいかに。」と、涙にふるふおろ〳〵聲、言葉の文もしどろもどろに、身を投げ伏して取附きたるは、聲音に紛ふかたもなき、その昔の我が妻にぞありける。

六　藝術と家庭生活

池田鍬子

現代の社會は日を逐うて複雜になるので、私達の心はこれが應接に多忙を極めて、疲勞し、困憊し、屈託する。この焦立たしい心持は、或空虛を感じ、何等かの救を求めて止まない。即ち全く活動の巷を離れた別乾坤に伸び〳〵と打寛いで、疲勞の恢復と精神の慰安とを得たいと希望するやうになる。これは決して逃避ではなくて、物質の世界を超越しようとする必然の要求である。

池田鍬子　岡山縣の人、明治十八年生、男爵池田長康の妻。

かゝる心持の空虛を塡充して、枯渴した生活に再生の生命を與へるものは藝術である。藝術が種々の象樣々の相で出現して來る時、私達の精神は快い刺戟を受けて、生命の漲つた力で充實される。隨つて私達は人生を意味のあるものに考へ、現實世界の外に、永遠の理想世界に生きることが出來る。そして理想世界に生きることの出來るといふことが、やがて現實世界の生活を一層豐富に一層偉大にする所以であると思はれて來る。

私達女性、殊に家庭を有つ女性は、實生活を離れて存在することを許されない、またそれを希望する必要もない。それは女性には女性としての立場があるからである。その立場に忠實な生活は、男子のそれに較べて少しも低劣でない。尤も家庭に於ける女子の實生活といふ意味は、單に實際的な、物質的な、そして幼稚な、衣食住の整調にだけ滿足してゐる生活狀態を指していふのでなく、もつ

と意味の深い、理想に燃えた、生々としたそれであることは言ふまでもない。それは物質的の豐かさではない。物質的の豐かさも全然これを無視することは出來ないけれども、しかし、それが決して唯一緊要のものではない。

精神的に豐かな靈的生活は、婦人の手によつて完成されるべきである。男子は婦人によつて豐潤にされた家庭を牙城として、外に出て鬪ふ場合が多い。私達女性が、動もすれば現實に囚はれ易い家庭生活を、內容の豐富な、生命の漲つた、換言すれば、藝術味の充ち滿ちた狀態に誘導することは、どんなに樂しい美しい仕事であるか知れない。そして、自分が藝術に憧憬を持つ心、自分の藝術に對して傾倒する心を、層一層擴大して、家庭の內に一種の藝術的雰圍氣を作り出すことに努力し、家族の總べてが、藝術的憧憬の下に、互に理解し互に個性を尊重し合つていつたなら、各自の藝術完成に

矛盾の起るやうな悲哀は起らないであらう。かくて家庭は向上し、完成された生活が營まれ、そこに人間は成育し、隨つてまたそこから尊敬すべき藝術も生れて來るのである。

藝術を解し趣味を尙ぶ家庭にあつては、親子・夫婦・同胞の間に、骨肉以上の一種の精神的理解が成立するに相違ない。そして、涼しい夏の夕の涼臺の上の假初の會話にも、霙降る冬の夜の煖爐の前の團欒にも、言ひがたい融和があり、共鳴があり、感銘がある。思ふに、この美しい樂しい境地を望まないものはないであらう。

藝術には藝術そのものの第一目的があつて、たゞ生活向上の方便にだけ利用されるものでないことは今更いふまでもないが、私達女性の立場として、否、自分としては、藝術を尙ぶ至誠の心持さへも、日常生活の中に育まれるものであると信ずる。そして、さういふ努力をすることは、私達の生活と毫も矛盾撞着しないと思ふ。即

ち私達の生活に於ける現實と理想とのシンフォニー(Symphony)が得られると思ふ。家庭がかゝる狀態に統一された時、始めて精神の疲弊を救ふことが出來、そして、生命の溢れた別乾坤に新たな活力の泉を汲むことが出來るのである。

七　樂翁と日本外史

萩野由之

*賴山陽の日本外史を讀んだ人は、その卷頭に載せてある序文、即ち山陽が*白河樂翁に上つた書狀をも讀んだらう。そして、その記すところによつて、その時に於ける山陽の歡喜のいかに大であつたかをも知つただらう。民間の浪人儒者たる山陽が、一家の意見を以て論述した歷史が、今でこそ隱居の身分であれ、嘗て天下の大宰相として、聲名一世を驚動した松平定信その人から、その著述を見たいと懇望された名譽は、當時に於ては空前のことだつたから、

萩野由之　新潟縣の人、文學博士、東京帝國大學教授。

賴山陽　名は襄、通稱久太郎、安藝國の儒者、天保三年(一八三二)歿、年五十三。

白河樂翁　松平定信、磐城國白河の城主、幕府の老中、文政十二年(一八二九)歿、年七十二。

山陽の履歴中に於て、實に光彩のある事蹟の一つに數へるべきである。

しからば、樂翁の側から見た山陽は如何。樂翁の日記には、實に次のやうに記されてある。その記事は文政十年のことで、即ちその薨去の前々年である。左にこれを抄錄しよう。

閏六月十一日の條に、

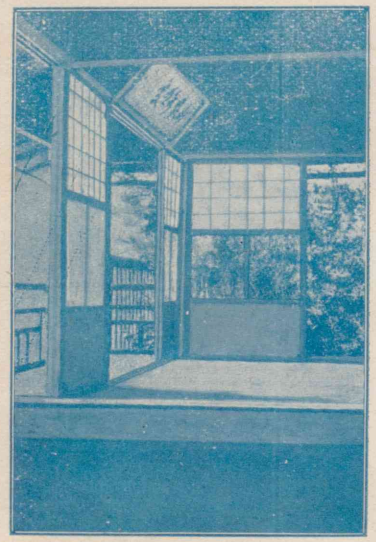
「日本外史を見る。こは賴氏の著述にて、二十二卷あり、將軍を列傳にせしなり。かねて聞き傳へてければ、人もていひやりたるを、思の外喜びて、箱までしつらへてこしたり。序を新に作り、翁の望めることをせにかいて、翁を韓魏公に比し、蘇轍のことなど引出でて書けるが、それも退隱の翁なれば嫌疑なきよしを書けるも、打見てはいとをかし。韓氏に比せらるゝ身にあらぬを、何かとかれが徒といふは、退隱してはにくみなきところよりやい

文政　仁孝天皇の年號。（一八二四―一八三〇）

韓魏公　名は琦、宋代の賢相。（一〇〇八―一〇七五）

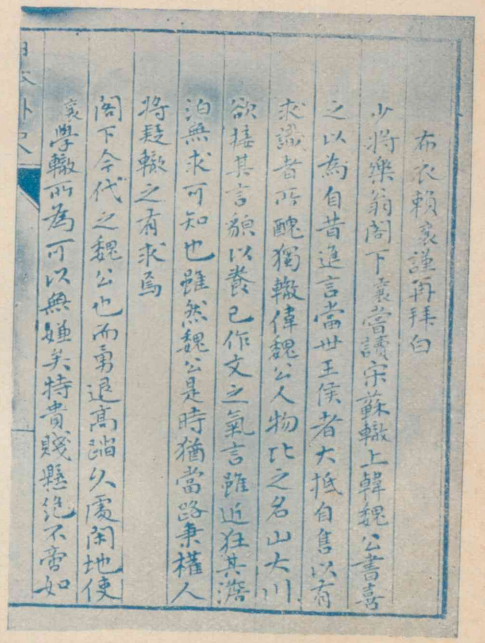
蘇轍　洵の子、軾の弟、唐宋八家の一人。（一〇三九―一一一二）

賴山陽



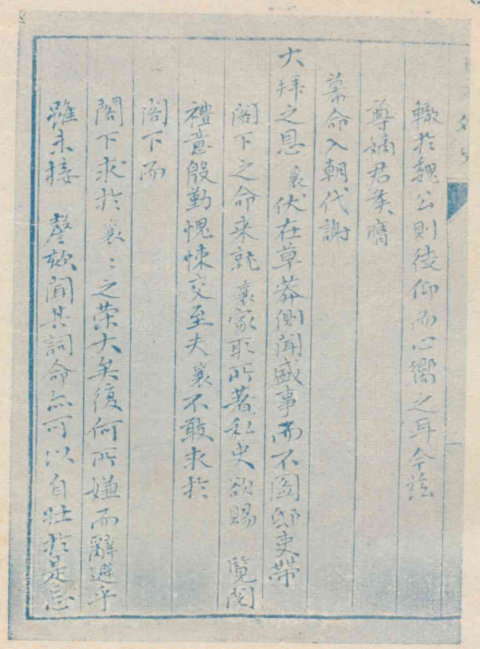
同室内

賴山陽の住宅



山陽上樂翁公書一頁（表）

布衣賴襄謹再拜白
少將樂翁閣下襄嘗讀宋蘇轍上韓魏公書喜之以為自昔進言當世王侯者大抵自售以有求識者所醜獨轍偉魏公人物比之名山大川欲接其言貌以養己作文之氣言雖近狂其濟泊無求可知也雖然魏公是時猶當路秉權人將疑轍之有求焉
閣下今代之魏公也而勇退高蹟久處閑地使襄學轍所為可以無嫌矣特貴賤懸絶不啻如



同（裏）

布衣賴襄謹再拜白
少將樂翁閣下襄嘗讀宋蘇轍上韓魏公書喜之以為自昔進言當世王侯者大抵自售以有求識者所醜獨轍偉魏公人物比之名山大川欲接其言貌以養己作文之氣言雖近狂其濟泊無求可知也雖然魏公是時猶當路秉權人將疑轍之有求焉
閣下今代之魏公也而勇退高蹟久處閑地使襄學轍所為可以無嫌矣特貴賤懸絶不啻如
轍於魏公則徒仰而心嚮之耳今茲
尊嫡君侯膺
慕命入朝代謝
大拜之恩襄伏在草莽側聞盛事而不圖邸吏帶
閣下之命來就襄家取所著私史欲賜覽閱禮
意殷勤愧悚交至夫襄不敢求於
閣下而
閣下求於襄襄之榮大矣復何所嫌而辭避乎
雖未接謦欬聞其詞命亦可以自壯於是忘

ふらん。たゝきて見れば、學才もなく、歌はいさゝか詠めども、文も長歌も出來ざるものを、なにくれといふはいかにぞや。いそぎその序を取離しぬ。人にも借して見するに、それがあれば見せがたきなり。」

この序を取離したのは樂翁の謙遜である。この山陽自筆の本書が今も松平家に傳はつてゐて、先年影寫版になつて世間へも出たことがある。

七月五日の條に、

「この頃、かの外史見るにもなかりしが、はやきのふ夕つ方、二十二卷見終りぬ。かゝれば、昔勵みて見しをりを思ふ。通鑑（つがん）なんども一日二三卷づつ讀みてけり。予が好むものは看書なり。あまりに僻する故に病を生ず。書寫はこれに次ぐ。病起るほどにあらねば、看書よりは好まぬなるべし。遂に肩・背疼痛、口中腫

通鑑　資治通鑑の略、司馬光著、二百九十四卷。

れ痛み、久しく惱みてより廢書に至りぬ。かの看書は見るばかりにはあらず、とかく我に引當てて見る故に、心を苦しめなどすることにて、事實は心に留めぬれども、姓名・月日などはつゆも覺えず。皆わがための看書にして、通例のとはたがへり。

林氏*この外史を見て感じ給ふ。『厚謝してよかるべし。』とのことなり。初め、この賴久太郎の文を見給ひて、感じ給ひ、『この才ありて躬行まだしきわかうど、窮しなば必ず名を汚さん。藝州大藩、かゝるもの捨ておくは恥なるべし。ゆたかに文園に遊ぶやうに手當して才を養はば、年とりて、文才ばかりか、國のためともなりぬべし。一旦汚名あらばいかゞはせん。』と、さま〴〵苦にし給ふ。この道を維持する人にして愛才の德ある、感ずべし。『それとても、たゞこの文才ばかりの人に、林家より何かと推擧することは、またこの道にかゝりて重きことなり。諷せんとさま〴〵

*林氏　述齋のこと、名は衡、大學頭、天保十二年（一八四一）歿、年七十四。

すれども、まだ京師に窮すと聞く。』と歎き給へり。」

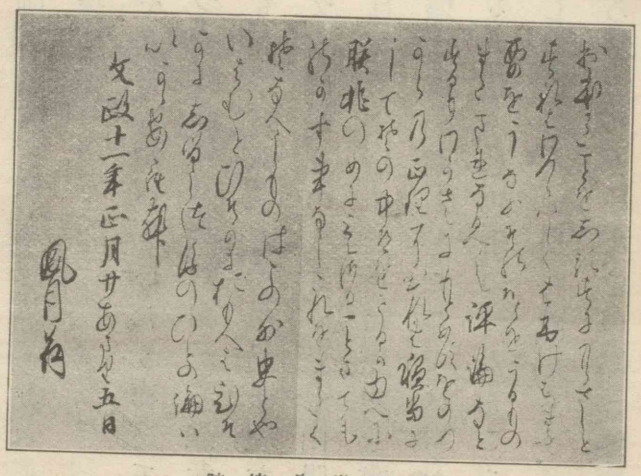
同十月二十八日の條に、

「賴久太郎に賞美やりたるが、いといたう喜びて、狀かず〳〵來る。」

これらの記事によつて、日本外史が當初から識者に重んじられたことが解るが、中にも、大學頭林述齋が山陽を視た眼光には驚かざるを得ない。曰く、「文才ばかりの人」と。蓋し山陽は史學のために歷史を書いたのではなく、文章のために歷史を書いたのであつた。それゆゑ、史實の眞僞は彼の問ふところではなかつた。その趣は手翰にも見えてゐる。しかし、述齋の見るところはそれではなくて、彼が經學を主としないのをいつたのだらう。それは山陽が第一義としないところであつたから、その點を述齋は輕んじたのである。しかし、述齋が人才を愛して、その終を能くさせようとした心と、林家で保護がしにくいといつたところとは、流石に述齋の器

量といふべきだらう。

山陽が外史に於ける態度は、事實を枉げても文章を面白く書かうとするのだつたから、畫の戰では面白くないところから、夜戰に直して書いたなどは、その一例である。前記の樂翁の讀書法が、聊かこれと似通つてゐるのも妙ではあるまいか。樂翁は曰く、「事實は心に留めぬれども、姓名・月日などはつゆも覺えず。」と。これがどうして普通の讀書法といへよう。畢竟自己修養のために書を讀むので、古人の爲したところを以て自己の鑑とするのだから、その何人たり何時代たるかは頓着しないのである。史學者としてはこれでは濟まないが、樂翁のやうな人の立場としては學ぶべきところだらう。隨つて文學者としての山陽の立場としては、日本外史を著すに當つても、あまり史實に重きをおかなかつたのも、必ずしも咎めるべきではなからう。



白河樂翁筆蹟

おほかた、ことをしるすにもらさじとすれば、わづらはしく、はぶけばまた要をうしなふ。そのほどをうるもの、またまれなるべし。評論などするも、わがさえにもとめず、おのづからの正理に至れば、穩當にして、その中道をうるがゆゑに、朕兆のめにみえざることまでも、のがす事なし。これをまたくそなへしものは、この外史とやいはむと、ひそかにおもへば、ひそかにしるしつ、後のひとの論いかゞあらむ。

文政十一年正月
廿あまり五日

風月翁

八　野村望東尼

佐々木信綱

望東尼（もとに）は筑前國福岡の人、文化*三年、浦野勝幸の第三女として生る。容姿麗しく、歌を善くし、書に巧みに、裁縫・刺繍の業にも長けたりしが、同藩の士野村貞貫の、詩歌に嗜み深く、正義・廉直の士なるを聞き

佐々木信綱　三重縣の人、明治五年生、歌人、文學博士、東京帝國大學講師。

文化　光格天皇の年號。（一八〇四―一八一七）

て、先妻の子三人あるをも厭はず、野村氏に嫁ぎて、よくその家を治め、先妻の子をおほし立て、一家和合、春風の吹くが如くならしめぬ。後、家を長男に讓りて、平尾村のあたり、靜かなる境に世を避けしに、安政の四年といふに、夫世を去りしかば、剃髪して佛道に入り、その名もと女を望東尼と改めぬ。

當時幕府の專横甚しく、時勢の日に非なるを見るにつけても堪へがたく、密かに交を志士に結び、あるはその山莊を會合の所とし、あるは同志を隱まひなどして、眞心を盡しぬ。されば、かの僧月照が薩摩へ下りし時はこゝに宿し、また平野國臣・高杉晉作等をも潛ましめ、その危きを救ひてねもごろにいたはり、また太宰府に幽閉せ

野村望東尼

平尾村　今、福岡縣筑紫郡八幡村の大字。（福岡市外）

安政　孝明天皇の年號。（一八五四―一八五九）

月照　名は忍向、京都清水寺の僧、安政五年（一八五八）十一月、西郷隆盛とともに海に投じて死んだ。年四十六。

られし三條公に謁しなどしたり。

かゝること積り〳〵しかば、終に罪を得、捕はれて浪風荒き玄海灘の一孤島、陸地を距ること五里の沖なる姫島の牢獄に込められぬ。そこに在ること二年、身を容るべきは僅かに四疊の荒板敷、めぐりには松の檻木を組み、荒格子を構へて、海見ゆる南の方にのみ小さき窓ある牢の中に、かよわき老の身の押込められて、暑さ寒さを忍びゐしに、かの高杉晉作はその舊誼に報ゆべく、同志を遣りて姫島の牢檻を破り、望東尼を奪ひて長門に隱し、更に三田尻に移ししかど、老軀長く堪ふることを得ず、維新の大業成るを見ずして、慶應三年十一月六日、年六十二歳にて、病のために空しくなりぬ。

女ながらも、皇國のおんため大君のおんために心を碎き、あるは志士の病をとぶらひて慰め勵まし、あるは同志の間に入りて互に志を通ぜしめしなど、その心づかひなみ〳〵ならず、まことにその一

平野國臣　福岡藩士、幕末の志士、元治元年（一八六四）七月刑され（或は三十九）た、年四十三。

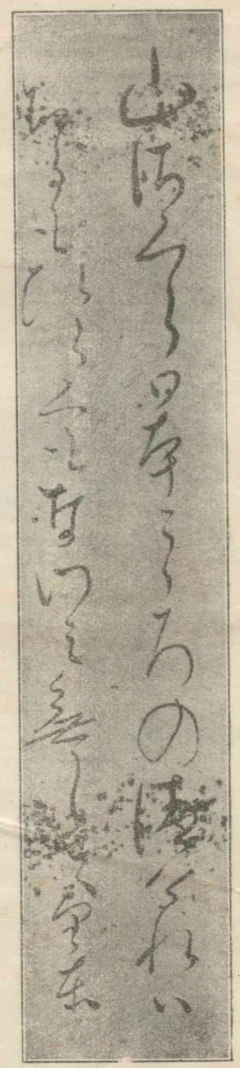
高杉晉作　山口藩士、吉田松陰の弟子、慶應三年（一八六七）歿、年二十九。

三條公　名は實美、太政大臣、明治二十四年歿、年五十五。

姫島　博多灣内にある。

三田尻　周防國、今は防府町といふ。

家の良妻賢母なりしが如く、陰に維新の大業を扶けし烈婦の一人なりき。その一生の閲歴かくの如く、さながら一篇の詩なり。しかも、忠誠燃ゆるが如き眞心を緯とし、感じ易き優しき女心を經として、優れたる才をもて、この間に織りなしつる歌文の錦、いかで世の常なるべき。



望東尼筆蹟

彼が歌は、或は悲憤慷慨、憂國の至情溢れて、句々皆血涙の跡を留むるあり、或は優麗閑雅、やさしき鶯の初音を聞くが如きあり。しかも、この両面を相對へ見て、始めてその優れたる人となりを知り、その歌のまことの趣をも解しつべく、なよ竹の撓みながらに猛く雄

山ざくら日本ごころの清けばちるもひらくもなつみ無して　望東

雄しきところあるをも知り得べし。しかのみならず、その歌の調の清新なる、その觀察の奇警なる、また詠みざまの巧みにして、手の利きたる、その修辞に用語に自由輕妙にして、その師大隈言道（おくまことみち）さながらなるあり。もとより生具の天才ならんも、またよく師を學びて堂奥に達せしものにあらざらんや、以てその修養の淺からざりしを知りぬべし。而してその歌の慷慨悲憤の一面は、これ彼が境遇・性情より得來りしところにして、言道が和歌には絶えて見えざるところなり。

九　日本の女性

土井晩翠

探は巖冬雪降るなかに
ほゝ笑む梅にほひやぢふ

大隈言道　筑前國福岡の人、歌人、明治元年歿。年七十一。

土井晩翠　名は林吉、仙臺市の人、明治四年生、英文學者、第二高等學校教授。

誉れ千年の蘭なる谷よ
潜める幽香かをりに似るあ
心さ、ぬ若き涙波捲く淵に
かゞやく白玉光といづれ
ほゝ、君見えざる垂上の綿
あゝ君聞えぬ高のほまれ
あゝ君知きざる究竟の操
大なる國民君より起る
涙になさ者に操よ愛に
ほゝ、君やさしき女性の力

10　母たるべきために

三宅やす子

私達女性は母たるべきために生れて來てゐる。やう〳〵歩み初めた頃から、枕、それがなければ、座蒲團を二つ折にしてでも、自分の着物を着せて、紐で負つて、「ねん〳〵よう。」と、襁褓も取れないお母さんぶりを發揮することは、女の誰でもが必ず經て來た道程だらう。「お飯事」、「姉樣ごつこ」、幼い時の無心の遊戯にも、女は家庭を中心として、母といふこと子といふことに心持を支配されてゐるのである。女として眞に生くべく、「母」といふ名は實に絶大の力を有つてゐる。夫を助けることが、女性にとつて樂しく且意義のある務ではあるが、更に母として子供の成長を見守ることが、女性のあらゆる希望の中で、一番熱烈なものであると言はねばならない。

母たる尊さは、また強さは、子供にとつて、母以外に母のないことである。育兒のためにどんな苦みどんな悲みを感ずることがあつ

三宅やす子　京都市の人、明治二十三年生、故理學博士三宅恒方の妻。

ても、「母がかほどまでに苦しく感ずることを、母以外の誰がこれを忍んで盡してやるだらうか。」と自ら反問する時、そこにあらゆる困苦に對する限りない勇氣が湧いて來る。

祖母だとか、叔母だとか、姉だとか、または子供好きの人達によつて、子供は母に似た慈愛を經驗することは出來る。しかし、それらの人達の愛は、單に母の愛に似た愛に止つて、到底母の愛とは比較にならないほど稀薄なものである。宇宙の中で、自分一人が子供に對する絶對の愛の所有者であると思ふ時、また、子供が保護を受けに甘えて來るべき唯一の人であると思ふ時、眞に生命に對する執着が強められて、しみ〴〵と自己の生の力强さを感ずることが出來る。

三宅やす子

自分の痛みは何人よりも自分が最もよく感知すると等しく、母は、自分に酷似した子供の痛みと惱みとを、他の誰よりも鋭敏に推知することが出來る。子供を育てる樂みと自信とは、實にこの點に存するのである。

自分と自分の最もよく知つてゐる夫との素質を受けた子供に對して、自分の缺點と夫の缺點との芽をなるべく摘んでやりたいと思ふのが母たるものの誰でもの希望であり、更にその長所は出來るだけ伸してやりたいと思ふのがその熱望である。そして、それを最もよく盡しおほせる人は母であるから、母は子供を活かす唯一の人であらねばならない。

過ぎ去つた自分の生涯の懷かしく惜しまれる時に、我が子供の將來を想像して無限の希望を抱くことは、なんといふ樂しさだらう。母としては、子供になるたけ種々のものを與へたいと思ふ。それ

には勿論財産も重要なものの一つではあるが、就中、親が踏んで來た道の上に横たはる樣々の躓となる石を、容易に踏み越えることの出來る力をしつかりと與へておきたいといふことは、眞に母の痛切な願望でなければならない。

さりながら、全世界にたゞ一人の信頼されるものとして「よい母」となるべく、私達はあまりにその實力を缺いてゐるのを悲しく感ずることがある。そしてまた、子供を愛する力は、母が自然に與へられてゐる美しく且根强いものであるにも係らず、どうかした時、ふとこれを裏切る、自ら憎むべき、淺ましい心の閃くことが、どうしてないと言ひ切られよう。

寢食を忘れて子供のためにばかり盡す努力がやがて實を結んで、子供がそれ〴〵一人前になつた時、或意味で、今までの密接な母子の關係から離れねばならないことを想像する時には、限りない寂

しみも湧いて來るけれど、鳥獸でさへ、虫けらでさへ、親が子を可愛がるのは自然である。まして人間が子を愛し育てるのに、義務的觀念を有つのは全然間違である。

子を育てるといふこと、それ自身の有つ言ひがたい、言はば一種の快樂を、私達は、より高く、より美しく、より尊いものとして完成したいと思ふ。

一一　息女への教訓

烏丸光廣

一筆申しまゐらせ候。しかれば、そもじ幾千代の色も變らぬ常磐木の枝を連ぬる御祝として、よそへ越し給ふべきこと、誠にめでたう覺えまゐらせ候。申すまでは候はねども、身持やさしく、心おとなしく、さゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで繁昌して、孫子の末々までも御榮え候やうにと打願ひまゐらせ候まゝ

烏丸光廣　藤原氏、德川初期の歌人、寛永十五年（一六三八）歿、年六十。

さゞれ石　我が君は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで。（讀人知らず、古今集）

に、筆に任せて申しまゐらせ候。

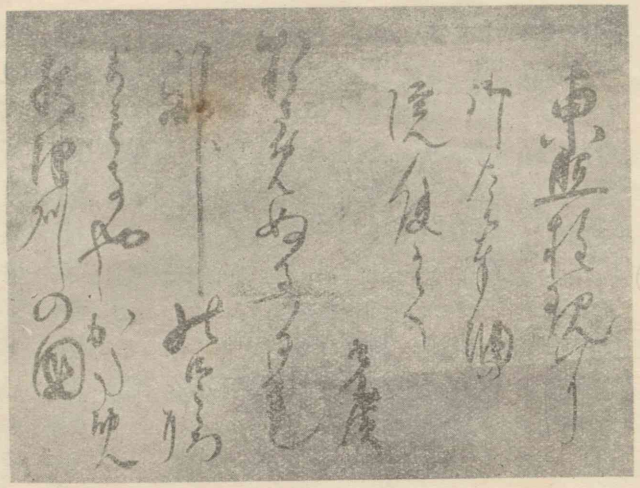
第一、慈悲の心ありて人を憐み、虫・獣の上までも露の情を懸け給ひ、おもては「たゞ青柳の糸の風に靡くが如く物柔かにして、人の心を酌み知り、僻める心を押直し、御嗜みなさるべく候。さてまた、心の中は石や金よりも堅く、あだなる心をもち給はぬこと肝要にて候。「*忠臣二君に仕へず、貞女両夫に見えず。」とあれば、くれぐれこのことわりを朝夕心に懸け給ひ候はば、神や佛の御守もおはしますべく候。

第二、まれ人など御渡り候はん時、内に無念のこと候とも、聊かその氣色をつゆほども見せず、何となく打向ひ、春は青柳・梅・櫻・鶯・雲・雀、夏は卯の花・菖蒲・橘・杜鵑・螢、秋は月・紅葉・霧・虫・鹿、冬は雪・霜・霰・霙・鴨・鷹、いづれもその折に觸れたる物語などして、懇ろに取りはやし給ふべく候。さりとて、年若き人のあまり睦しげなるも外目い

*忠臣二云々　忠臣不レ事二二君一、貞女不レ更二二夫一。（史記）

かゞあるべき。たゞ何となくなぞらへて、とかくしのぎなきやうに愛々しく候はんことこそあらまほしく候へ。

第三、召使ふ人の疎略にて、何事も思ふやうになく候とも、忍びやかにさとし言をもいひ聞かせ給ふべく候。それをも聞きいれず候はば、責め誡めもあるべく候。さりとて、あるじなどの聞かせ給ふところにては口惜しく候。いかにみめ姿うるはしき兒・女房なりとも、腹を立てたる顔は見にくきものにて候。しかも若き人の聲高に怒り候體、淺ましく候。さ



烏丸光廣筆蹟

東照權現に御たち奉納の院使にて光廣おさめぬるぎも神つのみこゝろにかたまるもや秋津州の國

て、さとし言をも聽くまじきものと思ひ給はば、里へ返し候はば、さのみ苦勞もあるまじく候。男も女もあまり短氣に候うては、難も出來、召使はれ候ものも、他所へ惡しきやうに名を立て、後には逃げ去るものにて候。

吉野なるなつみの川の川淀に
鴨ぞ鳴くなる山蔭にして

とよめる歌の心は、吉野の川は早く候、鴨は水の上に住むものなれども、あまり早き處には住みがたく、川淀とて水の淀む處に遊ぶとなり。況や人間の烈しきところには長らへがたく候。第四、夫婦の間、高きも低きも睦しく候はんことこそ、よその聞えもよろしく、心にくうも侍らめ。たとひ幾千代を送り給ふとも、聊かもあるじに見落されぬやうに朝夕嗜み候はんには、いよいよ千秋万歳を保ち給ふべく候。さてまた、無念のことをもさのみ思ふべからず。たゞ世のありさまをつら〳〵と見て、心をものどやかに過し給ひ候はば、ゆくすゑよきことのみにてあるべく候。歌に、

事足らぬ世をな恨みそ鴨の足の
短くてこそ浮ぶ瀬もあれ

さてまた、心にかけて習ふべきは筆の道にて候。いかなる位高き人中にても、おめずしてしとやかに書きなしたるは、いとけだかく見ゆるものにて候。上にも下つ方にも、無手に候はば、不自由なるのみかは、その身も賤しく成りさがるものにて候。「我・人の用に立ちなんものは、第一鳥の跡なり」と、或ふみにも見え候まま、常々御稽古ありたく候。殊更和歌は家のものなれば、申すに及ばず候へども、尋常にけだかく、四季に應じて御詠みあるべく候。男も女もよろづにつけて身持・心遣ひ肝要に候。善きが上

吉野なる　湯原王、新古今集。

吉野川　紀の川の上流。

事足らぬ　道歌。

にも善きやうに願ひまゐらせ候。なほ重ねぐ
あまり山鳥の尾の長々しく書き列ね參らせ候。
御祝の數々申し承り候べく候。めでたくかしこ。

一二　病院

大町桂月

寒禽の聲絶えて、冬の夜やう〳〵更け行くまゝに、吹き荒ぶ木枯の風身に浸みて、木々のたゝずまひ怪しく、雲間を縫うて走る片破月かすかなる光を洩して、老松時にをろちの影を横たへ、穗に出でて招きし尾花の床荒れて、人目さへ枯れ果てたる古池の側、打寄する漣、苔蒸す巖を嚙みて、餘沫、落葉の上に囁き、爪先上りの小路、霜柱に鎖されて、踏むに聲あるもいと寂し。あはれ、「國破れて山河あり。」といひけん、世に時めきし大守の殿閣既に跡方もなくなりて、遺愛の樹木空しく榮えぬ。松風よな〳〵玉琴の糸に通ひて、木蘭の舟常

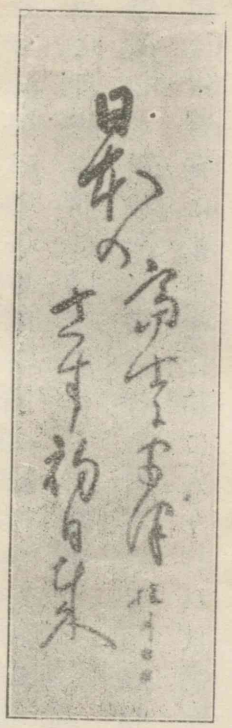
大町桂月　名は芳衛、高知縣の人、明治二年生、文章家。

國破れ山河在、城春草木深、感時花濺レ淚、恨別鳥驚レ心、烽火三月連、家書抵レ萬金、白頭搔更短、渾欲レ不レ勝レ簪。（杜甫）

に幾隊の紅裙を載せけんそのかみの豪華一炊の夢に歸して、烟波なほ愁を含めるに、短籬を隔てたる幾宇の堊壁、呻吟の聲に埋れて、こゝに二豎に苦しめらるゝもの、いくそばくといふことを知らず。篝燈の影ほの暗くして、廻廊のあたりに跫音あるは、みとりの女の歩むにや。咳嗽の聲手にとる如く聞ゆるにつけても、懷舊の情うたゝ止みがたく、九泉の下に眠れる人のこゝに病に惱みし樣、さやかに目睫の間に浮び出づるを覺ゆ。

年久しく親しみし家の若き夫人の、風邪の心地とて打臥しけるが、病は氣管支に移り、遂に肺に入りければ、病院に入りてぞ療治しける。病院に入りし時、國手は診斷して、「もはや治すべからず。」といへり。されど、夫人は治すべからずとは知らざりしのみならず、肺を病めることすら知らざりけり。この時なん年の暮なりける。夫人はいへり、「春を迎へなば我が病は癒えん。」と。やがて春を迎へぬ。

されども夫人の病は癒えず。またいへり、梅咲く頃に至らば癒えん。と。梅は咲きぬ。されども病は癒えず。またいへり、櫻咲く頃に至らば癒えん。と。櫻も咲きぬ。されどもなほ癒えず。かゝりしほどに、他に惱むところ出で來ければ、手術を受けしに、出血止まず、病勢一頓して、纔かに奄々たる一縷の氣息を存するばかりとなりぬ。絶



桂月筆蹟

え絶えなる聲して、ありし人々にこの世の暇乞して眼を塞ぎけるが、しばらくして眼を開き、眸を前後左右に轉じて、あたりに立てる人を見渡して、眼を閉ぢ、またしばらくして眼を開きて、あたりの人を見渡せり。かくすること二三回、辛うじて聲を出して、「嬢は、嬢は。」といふ。「先に人を遣りて呼び參らせたれば、程なく來り給はん。」と

日本の富士にまづさす初日哉　桂月

いへば、いと嬉しげに眼を閉ぢぬ。暫くしてまた眼を開きて、「嬢は、嬢は。」といふ。かくすることまた三四回に及びければ、見るにえ堪へで、車を飛ばせてその家に至るに、嬢の乳母は鏡ども取出でて化粧する樣なり。「速く嬢を連れて來よ」といひしたるに、一刻も猶豫することやはある。折にこそよれ、夫人の命は刹那も待たぬものを、その額の白粉、水に流して、疾く〳〵行きね。」といへば、いたう驚きて、己の化粧は止めて、嬢の衣はあれやよけんこれや相應しからんなどいふを、「この期に及びて着物を選ぶべしやは。時は一刻も移すべきにあらず、そのまゝにて、はや〳〵。」とて出し遣りぬ。一生母の顏をばえ知らざるべき幼女に向ひて、いかなる遺言かありけん。あはれ、咲き出でたる櫻の花は未だ散らざるに、夫人の花の姿は早くも無常の風に散りにけり。

その亡骸の未だ柩に收らずして、逆屏風の下にありしほど、夫人、平

生、銀杏返を好みたればとて、侍女泣く〳〵夫人の髪を銀杏返に結びぬ。　鴉鬢・蟬鬢、光澤ありて麗しきことは生前に異らねど、鸞離れ鳳別れて、幽明界を異にするものを、今更に誰がためにか粧はんとする。　棺中に金氣は禁物なりとて、金の指環は纖手より拔き去られて、三途（さんづ）の川の渡賃にとて、錢形を捺したる幾片の紙は添へられつ。　陰風鬼火を吹いて、月魄腥き處、枯れ殘りたる生花、ありし世の俤を留めて、一杯の土長く無常の露に霑へり。

あはれ、歳月東流の水に歸して、人生は浮漚に異らず。　末の露、本の雫、後れ先立つ例には洩れぬ人の身の上、歡樂極りやすくして、哀情長く忘れがたく、こゝに癒えにし人もこゝらあれど、今つばらにその名を覺えず。　たゞはかなくなりし人のみ思ひ出されてやる方もなきに、風一きは身に浸みて、夜はいたう更けぬ。　遠寺の鐘に送られて、いづち行くらん、月を掠むる孤雁の聲いとあはれなり。

三途の川　人が死んで閻魔の廳に赴く途中にあるといふ川。

一三　正月と詩歌

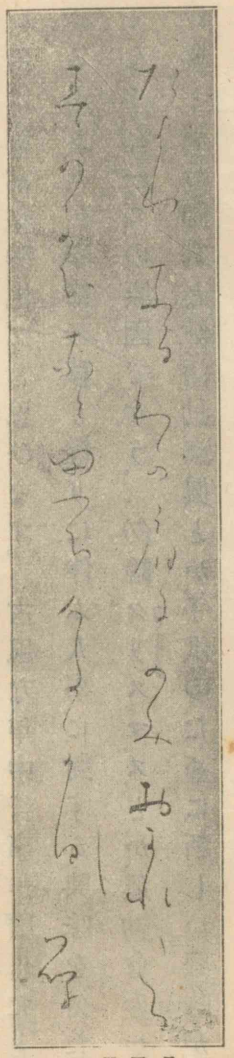
與謝野晶子

正月が來るといつても、物質生活のために忙しくて心の餘裕を持たない今日の人には、以前ほどの感激が起らないやうです。　殊に子供が私達の子供時代ほどに、お正月その他の祝日を嬉しがらないのは非常な變化だと思ひます。　古風な年中行事が廢れたといふことも、人が季節の移り變りに伴ふ人事に對する興味を持たなくなつた一つの原因でせう。　勿論クリスマス（Christmas）とか、運動會とか、遠足會とか、お伽劇とか、活動寫眞とか、子供のために新しい興味が起つたので、祝日が形式だけのものになつても、子供は別に損をしてゐるのでなく、それらのもの以上に多くの新しい感激を得てゐますが、一般の人は種々の强烈な刺戟に觸れながらも、それを感覺以上の全人的感動にまで受け入れて鑑賞する餘裕があまりないや

與謝野晶子　鐵幹與謝野寛の妻、もと鳳氏、堺市の人、明治十一年生、歌人。

クリスマス　ヤソ降誕祭、十二月二十五日。

うになつてゐると思ひます。歳暮や新年の贈答は年毎に盛になつていきますが、しかし、その大部分は功利主義の打算と虚榮心の滿足とに利用されて、愛と美とのデリケート（Delicate）な表現になつてゐないのを淺ましく感じます。



晶子筆蹟

とはいへ、正月といふと、忙しい中にも、子供らしい素直な鄕愁的な心がどこかに殘つてゐて、物質的關心に煩はされない淸淨な人間性の世界を覗いてゐるやうな氣がします。いかに多忙でも、せめて元日一日だけなりと、人は皆この嬉しい氣分の中に浸つてゐたいものだと思ひます。

たよわなるわが肩にのみおかれたる春のかひなと思ひけるかな　晶子

正月の喜びを詠んだ古人の歌には、一寸いゝものが見當らないやうです。貴族の新年宴會を詠んだ

紫の袖をつらねて來るかな
　春立つことはこれぞ嬉しき

といふ赤染衛門*の歌は、優れた作ではありませんが、即興の中にも永久の人情に觸れてゐます。衛門は高名な女歌人であり、長壽をして多作した人である割合に、熱情に乏しくて、いゝ歌を持たない作家ですが、この歌などはその作の中でいゝ部に屬してゐると思ひます。これに比べると、小大*の君の、

　いかに寢て起くる朝にいふことぞ
　　昨日を去年と今日を今年と

といふ元日の歌は、一頭地を拔いてゐます。古今集の巻頭にある在原元方*の、

赤染衛門　平安朝の女流歌人、大江匡衡の妻。

小大の君　三條院の女藏人。

在原元方　業平の孫、平安朝の歌人。

年の内に春は來にけりひととせを
こぞとやいはん今年とやいはん

といふ歌は、理に墮ちてゐますが、後拾遺集の卷頭の譽を擔つた小大の君のこの歌は、女性らしい實感の機微に根ざして、確かに詩の境に入つてゐます。嘗て上田敏博士が「心理體の歌」として推賞されたのは、この類の歌でせう。たゞ少し難をいふと、「昨日を去年と」といふ句はない方が好かつたと思ひます。「今日を今年と」だけで十分だつたのです。作者は折角實感から出發しながら、それを表現する場合に、餘計な元方の歌などを思ひ浮べて、その技巧を眞似たので、少し理窟めいた嫌のある歌になりました。近世の歌人間島冬道翁の、

けふを春きのふを冬といふ時は
遠く別れし心地こそすれ

上田敏　東京市の人、英文學者、文學博士、京都帝國大學教授、大正五年歿、年四十三。

間島冬道　名古屋の人、歌人、明治二十三年歿、年六十四。

といふ作もいゝ歌ですが、小大の君のこの歌が記憶にあつて、作者の實感を助けてゐると思ひます。同じく近世の歌人井手曙覽翁が、元日に古事記を讀んで、

春にあひてまづ見るふみも天地の
はじめの時と讀み出づるかな

と歌つたのは、氣象の高い作だと思ひます。

古い俳句にも、正月の句でいゝものは尠いやうです。芭蕉の「あゝ春、春、大いなるかな春云々」は談林調で、實感のない、言語の遊戯ですが、たゞ言葉づかひが歐洲の文脈に似てゐるのを珍しいと思ひます。一茶には、滑稽・飄逸の中に、人間味の溢れたいゝ句が比較的澤山あります。

元日や上々吉の淺黄空
門の木の阿房鴉も初聲ぞ

井手曙覽　橘氏、福井の人、徳川末期の歌人、明治元年歿、年五十七。

芭蕉　松尾氏、徳川中世の俳人、元祿七年（一六九四）歿、年五十一。

談林　西山宗因の創めた俳句の風。

一茶　小林氏、信濃國の人、徳川末期の俳人、文政十年（一八二七）歿、年六十五。

土藏から筋かひに射す初日かな
初空へさし出す獅子の頭かな
小坊主が棒を引いても吉書かな
その薺あるだけ買はん娘の子

俳句や短歌は形式の豫定された詩で、内部の感情の自律に從ふ自由詩とは非常に異つてゐるやうですけれども、出來上つた作物を見ると、形式が豫定されてゐるので、感情の緒が安らかにほぐれて出て來たのだといふ感じを與へます。丁度絃が張つてあつたので、風がそれに觸れて音を立てたといふ有樣です。感情が自由に表現されてゐさへすれば、俳句でも短歌でも皆自由詩だといふ氣がします。

吉田絃二郎

吉田絃二郎、名は源次郎、

一四　生活の深化

俗物にとつては、人生はパン*だけの、或は富だけの世界である。しかし、聖者にとつては、人生は實に魂の尊い殿堂である。生活の深化は、この俗物の心に打克つて、聖者の心を慕はうとする忍苦の行爲から生れて來る。生活の深化は凡人淨土である、日常の平凡な生活の刻々裡に淨土を發見していくことである、凡人の生活の救である。

「善人なほもて往生を遂ぐ、況や惡人をや。」

親鸞*のこの言葉は、凡人の救濟であり、凡人の淨土である。惡人なればこそ救はれ、凡人なればこそ淨土を踏むことが出來るのである。生活の深化は、凡人が凡人の心を以て凡人の生活を嚴肅に生きることである。換言すれば、自分々々の立場に於て、最も人間らしい生活を生きることである、最も人間らしい素直な心と素直な感情とを以て自分の生活を味ふことである。

佐賀縣の人、明治十九年生、早稲田大學教授。

パン　Pao、ポルトガル語。

親鸞　高僧、一向宗の開祖、本願寺の開基、弘長二年（一二六二）歿、年九十。

生活の倦怠は生活の煉獄である。自分の生活を踴躍して樂しむ時、平凡な生活に淨土が生れる。社會的の地位・名望・富といふやうな外的條件は、本當に人間らしい生活を送らうとするものにとつては、多くの場合、却つて荊棘となり足枷となる。一燈を捧げる誠實な貧者は、万燈を捧げる僞善な富者よりも、却つて本當の淨土を見出すことが出來るものである。

しかしながら、貧しいために必ず淨土を見出すことが出來るといふわけはなく、また富んでゐるために決して淨土を見出すことが出來ぬといふ理由もない。要は、どれだけ貧富・榮辱の觀念から超然として脫離し得るかといふ點に、淨土の現不現がある、どれだけ眞率に自分の人間的生活を思索し享樂し得るかといふ點に、淨土の影の濃淡がある。

淨土は一つではない。万人が救はれたとしても、万人が万人悉く異つた淨土を經驗せねばならぬ。淺い喜の淨土、深い喜の淨土、人々の生活深化の程度につれて、それ〴〵種々な淨土が生れて來る。明日の淨土は今日の淨土よりも更に深く尊くなければならない。かうして私達の淨土は絶えず進化していくのである。

淨土は金では買はれぬ。淨土は眞人間の心と涙とで購はねばならぬ。生活の深化とは、畢竟眞人間の心と涙とを以て、日々の生活の中に淨土を見出すことである。

一五　名門の最後

高山樗牛

一

古より亂離の世には反覆の人あるを免れず、安きを求め危きを避くるは、己みがたき人の情なればなり。さもさうず、一の池殿大納言*が舊恩を賴みとして兵衛佐が芳心を望みしを外にして、平家の

高山樗牛　名は林次郎、山形縣の人、文學博士明治三十五年歿、年三十二。

池殿大納言　平頼盛、忠盛の子、清盛の異母弟、母は池禪尼、權大納言。

一門は、上は大臣納言より、下は衛府・諸司の掾に至るまで、ともぐ〜に沒落の運命を同じうせしこそゆゝしけれ。

想へば、積善の餘慶既に家に盡き、積惡の餘殃早く身に及べり。もとより賴もしからぬ行末かけて、何をか望み何をか願はん。たゞ十善の帝王三種の神器を帶して、今ぞ一門の末路に立たせたまふ。いでや、いかならん野の末海の果までも行幸の御供申し、先世の契を踐み、且は重代の芳恩に應へなんず。あはれ、故入道大相國淨海大禪門も照鑒あれ。世はぜひなうも武運の末とこそ覺ゆれど、名門の最後はかくてこそあるべけれ。げに名門の最後はかくてこそあるべかりけれ。凡そ邦家の滅亡必ずしも麗しからず。たゞ平家の沒落に至りては、何物の美かよくこれに類ふべき。

源氏の興亡の如き、東夷（あづまえびす）の品下れる、いふばかりなし。重代の仇未だ報いざるに、同門の隙早く開け、四海僅かに一に歸すれば、鬩牆の

兵衛佐　右兵衛佐源頼朝。

入道大相國　太政大臣平清盛。

禍直ちに起る。兵衛佐はげに智謀に長けたる大將におはしけれども、みやびたる優しき心つゆばかり有ち給はざりき。我執あまりに強かりければにや、嫉深く、心僻めり。されば讒奸やゝもすれば骨肉の間に入り、一族の連枝、時に路傍の人にも劣れり。權勢いくばくもなく家臣の手に落ち、宗祠早く祀を絶てども、一人の義に殉ひ恩に死するものなし。此の如くにして兵威何の賴むところぞ、利運何の喜ぶところぞ。此の如くにして衰亡する、誰かまた一掬の涙を濺ぐものぞ。盛衰興亡はもと人事の常、むしろ深く喜憂するに足らざらん。たゞその運命に當るの人、心優しく情麗しからば、何の幸かよくこれに加ふべ

高山樗牛

き。あゝ、我をして時を同じうせしめんか、願はくは、源氏となりて興らんよりも、むしろ平家となりて亡びなん。

二

平家はさすがに名門のこととて、沒落の際まで、大義名分を執りて動かざりしは、ゆゝしくもまたあはれの極みなりき。木曾*は兵衛佐に疎まれて、東國の討手はや途にあり。强ひて院宣乞ひ受けけれども、孤軍もとより勝算なし。乃ち使を西國に立て、合體して兵衛佐討つべきよしを言ひ送りぬ。平家の答はかくなりき。

「よしや世は季になりぬとも、木曾なんどにかたらはれて、いかでか都に上るべき。畏くも十善の帝王三種の神器を帶してこなたに渡らせ給ふ。須らく甲を脫ぎ弦を外し、來りて軍門に降るべし。さらば東國征討の御供にも加へらるべきか。」

あゝ、何ぞその言辭の堂々として亡落のやからに類はざるや。平

木曾　源義仲、壽永三年歿、年二十一。（一八四）

家人に乏しきも、一時の權變を弄びて頽勢を廻さんとだに思はば、かゝる時こそ乘ずべき機會なれ。さるを名分の正しきを執りて、成敗の數を顧みず。若し偏に利害の眼よりすれば、迂は即ち迂ならんも、かくして滅びんは、詬を含みて存へんよりも、いかばかり麗しかるべき。

その太宰府に落ち行くや、緒方*の三郎使して申しけるは、

「まことに重代の芳恩を思はざるにあらざれども、一院*の仰もだしがたければ、九國におき奉るべき地も候はず。」

平大納言*乃ち衣冠束帶して、出で向ひて宣ひけるは、

「それ我*が君は天神四十九世の正統、神武天皇より人皇八十一代に當らせ給ふ。祖宗・歷代の神靈我が君をこそ守らせ給ふらめ。就中當家は保元・平治以來度々の逆亂を鎭めて、九州のものどもをば皆內ざまへこそ召されしか。しかるを何ぞや、かゝる重恩

緒方の三郎　名は維義。

一院　後白河法皇。

平大納言　平時忠、清盛の妻時子の兄。

我が君　安德天皇、高倉天皇の皇子、文治元年（一八五）崩御、御年八歲。

をも打忘れて、東夷の下知に從ふこそ奇怪至極なれ。」

本三位の中將一の谷に捕はるゝや、院宣屋島に下りて、かうぞ傳へける。

「三種の神器都に上せよ、重衡を放ち還さん。」

平家の請文こそまことに壯大ならびなかりしか。曰く、

「院宣謹みて承り畢んぬ。通盛卿以下、一の谷にて討たれけるものその數少からず。何ぞ重衡一人の宥恕を喜ばんや。三種の神器は、正統の天子一日も御身を離し給ふべきにあらず。そも我が君は故高倉の院の讓を受けさせ給ひてよりこゝに四年、東夷・北狄の禍に遭ひて、暫く西國に行幸あるのみ。天に二日なく、國に二君なし。還幸なからんに於ては、神器などか都に還るべき。そも〳〵賴朝は逆賊の裔、幸に入道相國の慈悲により申し宥められしところなり。しかるに、忽ちにしてこの鴻恩

本三位の中將　平重衡。

一の谷　攝津國須磨の西、鐵拐が嶽の南。

通盛　平氏、敎盛の子。

高倉院　第八十代、後白河天皇の第五子、養和元年（一一八一）崩御、御年二十一。

を忘れて、安りに干戈を弄ぶ。神罰やがてその身に返るべきか。君にも當家累代の奉公、亡父數度の忠節を思召し忘れずば、逆賊の裔に與し給はずして、早く西國の御幸あるべきか。一門の武運こゝに盡きなば、鬼界・高麗・天竺・震旦の果までも罷りなん。悲しいかな、人皇八十一代が間、傳承あやまりなかりし靈器、今にして空しく異國の寶とならんとは。宗盛頓首謹みて申す。」

かくて平家は亡びき。亡びしまでも、成敗のためにその名節を枉ぐることをなさざりき。あはれ、平家の世盛りはまことに大いなりしが、その沒落の更に大いなるには及ばざりき。麗しきかな平家、かくして滅びたりとて何の恨むるところぞ。

一六　忘れがたき日

姉崎嘲風

嗚呼、忘れがたきこの日かな。思へば、はや五年の昔、春光麗かに、南

鬼界　大隅國大島郡、大島の東方、周回七里。

宗盛　清盛の第二子。

姉崎嘲風　名は正治、京都の人、明治七年生、文學博士、東京帝國大學教授、高山樗牛の親友。

風薫ずる日、友に擁せられて家を辞し故國に別れしは、恰も今日のこの日なりき。帽を振れる客、巾を翻せる友、船上・艇中相隔たりては、面も定かならず、姿も終には見分かぬまでに消え失せぬ。「健在なれ。」「再び早く相見ん。」との別れの言葉なほ耳に響き、最後の握手なほ掌に感ぜられつつも、見渡せば、白鷗飛び交ふ海の面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りにき。嗚呼、かくて相別れたる我が友、今いづくにかある。彼はその夜西の方足柄を過ぎて、清見潟のほとりにさすらひ來り、恰もこの海樓に宿りて、離別の悶を遣りしなり。月は去り日

姉崎嘲風（パリ在留中撮影）

我が友　高山樗牛。
足柄　神奈川縣の山。
清見潟　靜岡縣興津町の南方海灣。

は逝きて、五年後の今日この日、我は來りてこの海樓にあれど、彼は既に世を謝して、また相見んによしなく、我をして孤影蕭然、欄に倚りて無限の感に沈ましむ。

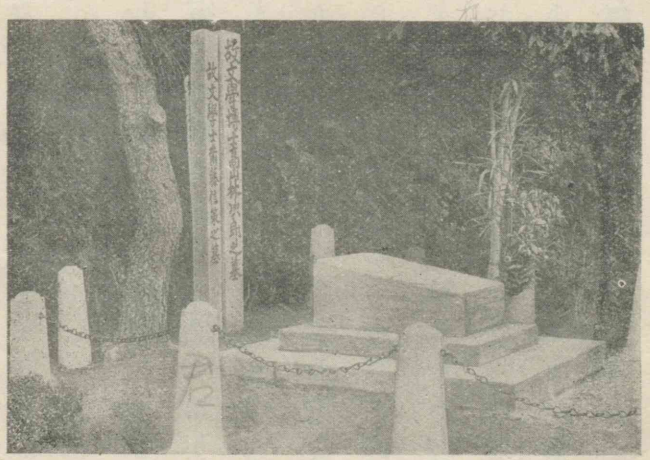
「三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を踰えて駿州に入り、清見潟の海樓に宿りて、離別の悶を遣りたりき。その夜、月明かに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。中宵欄に倚りて靜かに君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。」

人生遭逢のいともはかなきを歎じたる彼、今や我をこの世に殘し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見渡せば、有渡の山、影かすかにして、袖師の松原、雨におぼろなり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、總べて暗澹の中に包まれて、海面また死せるが如し。この海、この地、これ彼が久戀・懷慕の處なりき。この夜、この風光、これ彼が銷魂の種たりしこと幾たびぞ。山海舊の如く、風光昔のま

有渡の山　久能山の別稱。
袖師の松原　三保の松原の一部。

まにして、彼が友は已に歸り來つれど、彼とその姿とは今や尋ぬるに由なし。昨、彼が墓邊の櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫で、今夜、五年前の今日の別離を忍んで、彼が遺文に對す。嗚呼、我この流轉の世に處し、この友なくしていかにしてか憂懷を遣らん。

されど徒に憂ふるを止めよ、人に百歳の齡なく、世に別離なき人はあらじ。生死は世の常なり。別離は却つて懷慕の樂みを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて、神相接せしむ。友こゝにあり、悠久の夜またこゝにあり。彼が遺文、餘薫新



櫻牛兄弟の墓

彼が墓　櫻牛の墓は靜岡縣安倍郡不二見村龍華寺にある。

故文學博士高山林次郎之墓

故文學士齋藤信策之墓

にして、我が思慕、日夜彼に通ず。清見灣頭今宵雨しめやかにして、夜靜かなり。形は見えねど、彼は我と語り、我は彼に接し、松風・濤聲また時に款晤に入り來る。嗚呼、平生憂を同じうせる君と予と、先世何の契緣かある。身世匆忙として相移り、際遇已に相異り、生死・幽明相隔つと雖も、彼と我と長へに相伴はん。

歳月水と流れ去つて、五年の昔を今に返すよしなけれども、神相接しては、生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つては、彼も我も、人相異らず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見潟の山海また眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の墓邊に風靜かなれ。而して我はこゝに我が友と相語りつゝ、今宵一夜の眠に入らん。

一七　今様五題

一　舊き都

舊き都を來て見れば　淺茅が原とぞなりにける
月の光はくまなくて　秋かぜのみぞ身にはしむ

二　万劫年ふる

万劫年ふる亀山の　下は泉のふかければ
苔むす岩屋に松生ひて　梢に鶴こそ遊ぶなれ

三　松の木蔭

松の木蔭に立ちよれば　千年の緑ぞ身にはしむ
梅が枝かざしにさしつれば　春の雪こそふりかゝれ

四　一天四海

治まり靡く時なれや　一天四海のうちのみか
人の國まで日の本の　唐土が原もこのところ

五　蓬萊山

蓬萊山には千歳ふる　万歳千秋かぞなれり
松の枝には鶴巣くひ　巖のそばには亀遊ぶ

一八　新島守　その一

四月二十日帝おりさせ給ひ、春宮四つにならせ給ふに讓り申させ給ふ。近ごろみなこの御齢にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならんかし。同じき二十三日院号のさだめありて、今おりさせ給へるを新院ときこゆれば、御兄の院をば中院と申し、父みかどをば本院とぞきこえさする。このほどは、家實のおとゞ関白におはしつれど、御讓位の時、道家のおとゞ攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。

さても院のおぼし構ふること、忍ぶとすれどやう〳〵漏れ聞えて、ひがしざまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて伊

四月二十日　承久三年。
帝　順德天皇。
春宮　仲恭天皇。
御兄の院　土御門院。
父みかど　後鳥羽院。
家實　近衞氏。
道家　後京極良經の子。
あづまの若君　當時の將軍頼經。

賀の判官光季といふものあり。かつ〳〵かれを御勘じのよし仰せらるれば、御方に參りつる、つはものども押寄せたるに、遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院はおぼしめしける。

後鳥羽天皇

あづまにもいみじうあわてさわぐ。さるべくて身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻め來りなん時に、はかなきさまにて屍を暴さじ。おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふことならねば、かつはわが身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて都にのぼす。泰時を

あづま　この時の執權は北條義時。

前に据ゑていふやう、「おのれをこのたび都にまゐらするは、思ふところ多し。本意の如く清き死にをすべし。人にうしろ見えなんには、親の顏また見るべからず。今をかぎりと思へ。賤しけれども義時、君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横ざまの死にをせんことはあるべからず。心をたけく思へ。おのれ打勝つものならば、ふたゝびこの足柄・箱根は越ゆべし。」など、泣く〳〵いひきかす。まことにしかなり。また親の顏拜まんこともいと危しと思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今やかぎりとあはれに心細げなり。

かくて打出でぬるまたの日、思ひがけぬほどに、泰時たゞひとり鞭をあげて馳せ來たり。父胸うちさわぎて、「いかに。」と問ふに、「軍のあるべきやう、大かたのおきてなどは、仰のごとくその心を得侍りぬ。もし道のほとりにも、はからざるに、かたじけなく鳳輦を先立てて

御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らんに參りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべからん。この一ことをたづね申さんとて、ひとり馳せ歸り侍りき」といふ。義時とばかり打案じて、かしこくも問へるをのこかな。そのことなり。まさに君の御輿に向ひて弓をひくことはいかゞあらん。さばかりの時は、兜を脱ぎ弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身をまかせたてまつるべし。さはあらで、君は都におはしましながら軍兵を賜はせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戰ふべし」といひも果てぬに、いそぎ立ちにけり。

都にもおぼしまうけつることなれば、ものゝふども召しつどへ、宇治・勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意心ことなり。公經の大將ひとりのみなん、御うまごのことにて、北の方、一條中納言能保といふ人のむすめなり。その母北の方は故大將の

公經の大將　藤原氏、西園寺家の祖。
御うまご　將軍頼經、頼經は公經の女の出。

はらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心の輕きことをあぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信・尾張中將清經・中御門大納言宗家、また修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎ〳〵あまたきこゆれど、さのみは記しがたし。いくさにまじり立つ人々、このほかの上達部にも殿上人にもあまたありき。

後鳥羽天皇宸筆

中院はあかで位をすべり給ひしより、言にいでてこそ物したまはねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御さわぎにも殊にまじらひ給はざめり。新院はおな

故大將　源頼朝。
義朝―頼朝
　　―女―能保―女
公經
道家―頼經
忠見のひするのべに小松のなかりせばちよのためしになにをひかまし
七條院　藤原殖子、後鳥羽院の御母。
清經　正しくは清親。
修明門院　藤原重子、順德院の御母。
中院　土御門上皇。
新院　順德上皇。

じ御心にて、よろづいくさのことなども掟ておほせられけり。

一九　新島守

いつの年よりも五月雨晴間なくて、*富士川・*天龍などえもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬も打渡しがたければ、攻めのぼる武者どももあやしくなやめり。かゝれども、遂に都にちかづくよしきこゆれば、君の御武者も出で立つ。その勢六万餘騎とかや、宇治・勢多へ分ちつかはす。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉もおよばず、まねびがたし。あるはふかき山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべてやすげなく騒ぎ滿ちたり。いかゞあらんと君も御心みだれておぼしまどふ。かねてはたけく見えし人々も、誠のきはになりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたるさまどもたのもしげなし。六月十日あまりにや、いくばくの戰だになくて、つひに

富士川　駿河國にある。

天龍　天龍川のこと、遠江國にある。

御方のいくさやぶれぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と乱れ入りぬれば、いはん方なくあきれて、上下たゞ物にぞあたりまどふ。

あづまよりいひおこするまゝに、かのふたりの大將軍はからひおきてつゝ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷したてまつるべしときこゆれば、女院・宮々所々におぼしまどふことさらなり。本院は隱岐國におはしますべければ、まづ*鳥羽殿へ、網代車のあやしげなるにて、七月六日いらせ給ふ。今日を限りの御ありき、あさましうあはれなり。「*ものにもがなや」とおぼさるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御とし四十ぢに一つ二つやあまらせ給ふらん、まだいとをしかるべき御ほどなり。*信實朝臣召して、御姿うつしかゝせらる、七條院にたてまつらせ給はんとなり。かくて同じき十三日に、御船にたてまつりて、遙かなる波路をしのぎおは

鳥羽殿　山城國鳥羽にあつた、いはゆる城南の離宮である。

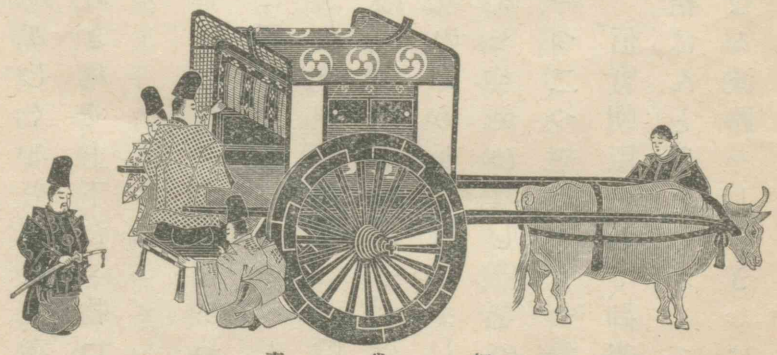
ものにもがなや　とりかへすものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はん。（源氏物語河海抄）

信實　藤原氏。

しますみこころ地、この世におなじ御身ともおぼされず。いみじう、いかなりける代々のむくいにかとうらめし。

新院も佐渡國に移らせ給ふ。上達部・殿上人、それより下はた殘るなく、このことに觸れたるたぐひは、重く輕く罪に當るさまいみじげなり。中院は初よりしろしめさぬことなれば、あづまにもとがめ申さねど、父の院遙かに移らせ給ひぬるに、のどかにて都にてあらんことといとおそれありとおぼされて、御心もて、その年閏十月十日、土佐の國の畑（はた）といふところに渡らせ給ひぬ。

本院は六つにて位につき給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下はおなじことなりしかば、すべて三十六年がほど、この國のあるじとして、万機のまつりごとを御心ひとつにをさめ、百の官をしたがへ給へりしそのほど、吹く風の草木をなびかすよりもまされる御ありさまにて、遠きをあはれみ、近きをなで給ふ御めぐみ、雨の脚よりもしげければ、津*の國のこやのひまなきまつりごとをきこしめすにも、難波の葦の乱れざらんことをおぼしき。藐姑射の山の峰の松もやう〳〵枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞のほらの御住居、いく春をへても、空ゆく月日のかぎり知らずのどけくおはしましぬべかりける世を、あり〳〵てよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立ちわかれ、おのがちり〴〵にさすらへ、磯の苦屋に軒をならべて、おのづからこととふものとては、浦に釣するあま小舟、塩やく煙のなびくかたをも、わがふるさとのしるべかとば



綱代車

畑　土佐國の西南にある幡多郡を中世は土佐畑と稱し貴人の配所となつてゐた。

津の國云々　津の國のこやとも人をいふべきに隙こそなけれ蘆の八重葦。（和泉式部、後拾遺集）

かりながめすごさせたまふ御すまひどもは、それまでと月日をかぎりたらんだに、あす知らぬ世のうしろめたさに、いと心ぼそかるべし。ましていつをはてとかめぐりあふべきかぎりだになく、雲の涙、煙の涙のいくへとも知らぬ境に世をすぐし給ふべき御さまども、口惜しといふもおろかなり。

このおはします處は、人ばなれ、里とほき島の中なり。海づらよりはすこしひき入りて、山かげにかたそへて、大きやかなるいはほのそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。まことに柴のいほりのたゞしばしとかりそめに見えたる御やどりなれど、さるかたになまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになん。はるばると見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今さらめきたり。しほ風のいとこちたく吹きくるをきこしめして、

柴のいほり　いづこにも住まれずばたゞすまであらん柴の庵のしばしなる世に。（西行法師、新古今集）

水無瀬殿　本院の造らせられた殿、摂津國三島郡本村大字廣瀬にあつた。

われこそは新島守よおきの海の　荒木田守武
あらきなみ風こゝろして吹け
同じ世にまたすみのえの月や見ん　山崎宗鑑
けふこそよそにおきのしま守（増鏡）

二〇　古調新調

元朝や神代のことも思はるゝ　松永貞徳
手をついて歌申し上ぐる蛙かな　松永貞徳
冬籠り虫けらまでもあなかしこ　西山宗因
お靜かに御座れ夕陽未だ殘んの雪　西山宗因
青麥や雲雀があがるあれさがる　上島鬼貫
古池や蛙飛びこむ水の音　松尾芭蕉
荒海や佐渡に横たふ天の川　同

二千里の外　三五夜中新月色、二千里外故人心。（白樂天、和漢朗詠集）

松永貞徳　貞門の祖。

西山宗因　談林の祖。

上島鬼貫　伊丹派。

古池や以下十二句元祿調。

雲雀より上に休らふ峠かな　松尾芭蕉
夕涼みよくぞ男に生れける　榎本其角

其角筆蹟

黄菊白菊その外の名はなくもがな　服部嵐雪
應々といへどたゝくや雪の門　向井去來
雁の聲おぼろ〳〵と何百里　各務支考

嵐雪筆蹟

悔みいふ人のとぎれやきり〴〵す　内藤丈草
長松が親の名で來る御慶かな　志田野坡

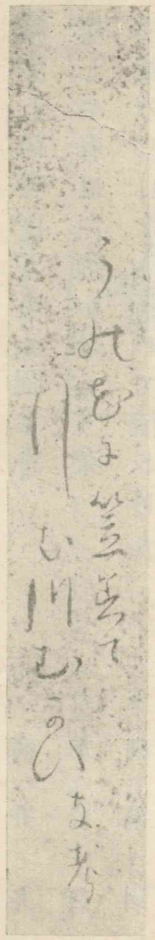
夜も既に明て水雞の行衛哉　其角

角力とり並ぶや秋の嵐雪　錦

ながゝと川一筋や雪の原　春花園凡兆
四條から五條の橋や朧月　森川許六

去來筆蹟

鍬さげて叱りに出るや桃の花　岩田涼菟
春の海終日のたり〳〵かな　與謝蕪村
さしぬきを足で脱ぐ夜や朧月　同



支考筆蹟

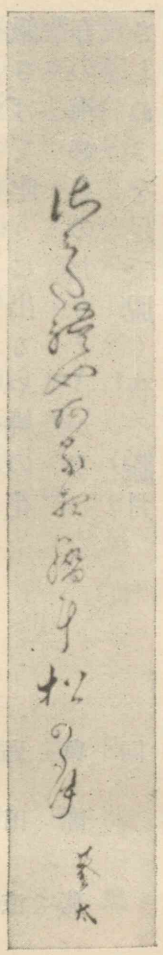
化けさうな傘かす寺の時雨かな　同
山路來て向ふ城下や凧の數　炭太祇

應々といへどたゝくや雪の門　去來

春の海　以下十句は天明調。

うの花に笠着て行む川むかひ　支考

馬借りてかはるゞに霞みけり　大島蓼太
曉や鯨の吼ゆる霜の海　加藤曉臺
霧深し何呼ばりあふ岡と舟　高井几董
美しや春は白魚かひわり菜　加舍白雄
枯葦の日にく折れて流れけり　高桑闌更



蓼太筆蹟

秋來ぬと目にさや豆の太りかな　大伴大江丸
尻べたの蚊をうつ芋の葉風かな　建部巢兆
東海道殘らず梅となりにけり　夏目成美
名月や江戸のやつらが何知つて　小林一茶

さみだれやある夜窃に松の月　蓼太

秋來ぬと目にはさやかに見えれども風の音にぞ驚かれぬる。（藤原敏行、古今集）

尻べた　以下文化文政前後の調。

二一　玉勝間抄

本居宣長

一　ふみ讀むことのたとへ

須賀直見がいひしは、「廣く大きなる書を讀むは、長き旅路を行くが如し。おもしろからぬところも多かるを經行きては、また面白く目さむる心地する浦山にも到るなり。また足强き人は早く、弱きは行くこと遲きも、よく似たり」とぞいひける。をかしきたとへなりかし。

本居宣長

二　富み榮えを願はざること

世々の儒者、身の貧しく賤しきを憂へず、富み榮えを願はず喜ばざるをよきことにすれども、そは人のまことの心にあらず、多くは名

本居宣長、伊勢國の人、德川中世の國學者、享和元年（一八〇一）歿、年七十二。

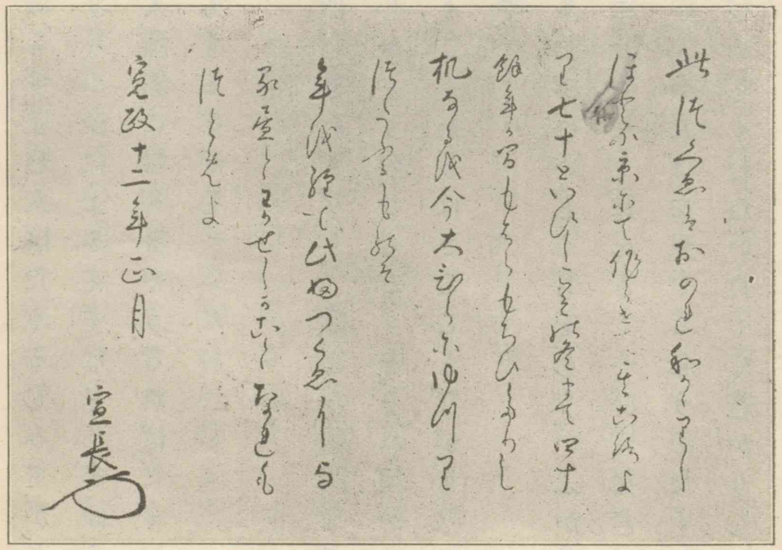
を貪る例のいつはりなり。まれ〳〵にさる心ならんものありとも、そは世のひがものにこそあれ、なにのよきことならん。ことわりならぬふるまひをして、あながちに願はんこそあしからめ、ほどほどにつとむべきわざをいそしくつとめて、なりのぼり富み榮えんこそ、父母にも先祖にも孝行ならめ。身おとろへ家まづしからんは、上なき不孝にこそありけれ。たゞおのがいさぎよき名を貪るあまりに、まことの孝を忘るゝはもろこし人のつねなりかし。

三　書うつし物書くこと

ふみをうつすに、同じくだりのうち、あるは並べるくだりなどに同じ詞のあるときは見まがへて、そのあひだなる詞どもを寫し洩すこと、常によくあるわざなり。また一ひらと思ひて、二ひら重ねてかへしては、そのあひだ一ひらをみながらおとすこともあり。これらつねに心すべきわざなり。またよく似て見まがへ易きもじ

などは、ことにまがふまじく、たしかに書くべきなり。これは寫しがきのみにもあらず、大方物かくに心得べきことぞ。

すべて物をかくは、事のこゝろを示さんとてなれば、おふなおふなもじさだかにこそ書かまほしけれ。さるをひたすら筆のいきほひを見せんとのみしたるは、いかなることとも讀みときがたきがよに多かる、あぢきなきわざなり。常にかきかはす消息文(せうそこぶみ)なども、もじ讀みが



本居宣長筆蹟

此つくゑはおのれわかゝりしほどに京にて作らせて其ころより七十といひしこぞの冬まで四十餘年の間もはらもちひたりし机なるを今大ひらにゆづりつたふるものぞ年を經く此ふづくゑによる書とわがせしがごとなれもつとめよ
寛政十二年
正月
宣長

たくては、いひやるすぢゆきとほらず、よむ人はたくるしみて、かしらかたぶけつゝ、かへさひよめども、つひによみえずなどしては、こよみがたしとかへし問はんも、流石になめきやうなれば、たゞおしはかりに心得ては、事たがひもするぞかし。

四　手かくこと

よろづよりも手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ學問などする人は、ことに手あしくては心おとりのせらるゝを、それ何かはくるしからんといふも、一わたりことわりはさることながら、なほあかずうちあはぬ心地ぞするや。

宣長いとつたなくて、常に筆とるたびにいとくちをしう、いふかひなくおぼゆるを、人のこふまゝに、おもなくたんざく一ひらなどかき出でて見るにも、我ながらにいとかたはに見ぐるしうかたくなるを、人いかに見るらんと、はづかしくむねいたくて、若かりしほ

どに、などて手習はせざりけんと、いみじうくやしくなん。

五　物知り人の物の理を論ずるやう

世の物知り人、人の身の上、世の中の理などを、さま〳〵心高く、いとかしこげには論へども、といふも、かくいふも、皆から文のおもむきにて、その垣つ内を出づること能はざるはいかにぞや。

二二　順禮唄

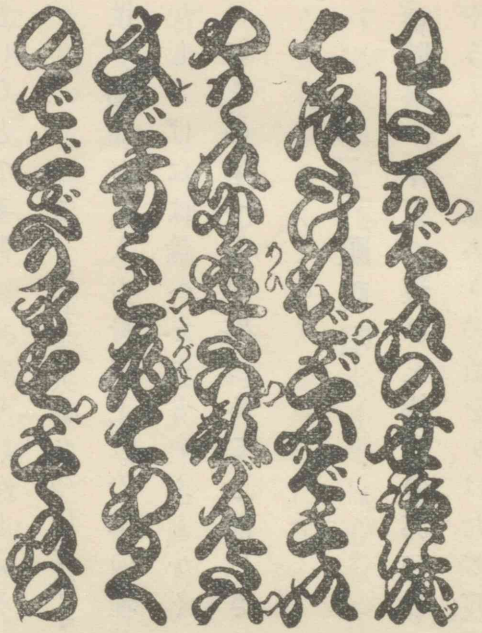
近松半二

「普陀落や岸打つ涙は三熊野の、那智のお山にひゞく瀧つ瀨」。年はやう〳〵とほ〳〵の、道をかけたる笈摺（おひづる）に、「同行二人」と記せしは、一人は大悲の蔭頼む、「故郷をはる〳〵こゝにきみゐ*寺、花の都も近くなるらん」。「順禮に御報謝」といふも優しき國訛。「でも、しをらしい順禮衆、どれ〳〵報謝進ぜう」と、盆にしらけの志。「あい〳〵、有難うございます」と、いふ物越から爪はづれ、可愛らしい娘の子。「定めて

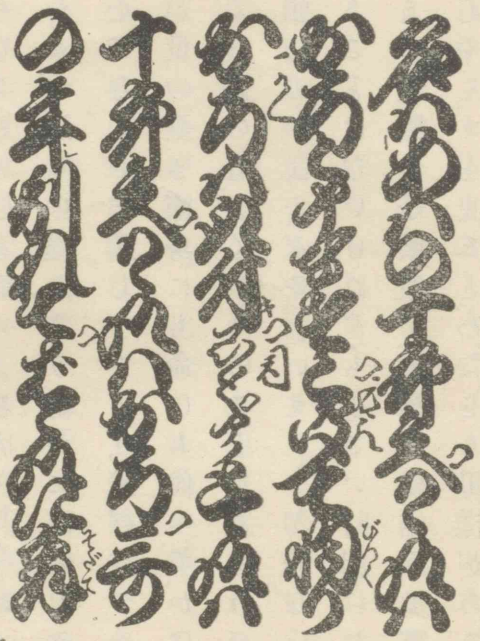
近松半二　大阪の人、德川末期ハ戲曲作者、天明三年（一七八三）歿、年九十九。

きみゐ寺　紀伊國海草郡紀三井寺村金剛寶寺、西國順禮の札所。

連衆は親御達、國はいづく。と尋ねられ、「あい、國は阿波の徳島でございます。」「うゝ、なんぢや、徳島。さつてもそれはまあ懐かしい。わたしが生れも阿波の徳島。そして父様・母様と、一緒に順禮さんするのか。」「いえ〳〵、その父様や母様に逢ひたさゆゑ、それでわたし一人西國するのでございます。」と、聞いてどうやら氣にかゝる。



お弓はなほも傍に寄り、「うう、父様や母様に逢ひたさに、西國するとはどうした譯ぢや。それが聞きたい。まあ、その親達の名は何といふぞいの。」「あい、どうした譯ぢや知らぬが、三つの年に父様や母様も、わたしを祖母様に預けて、どこへやら往かしやんしたげな。それで、わたしは祖母様の世話になつてゐたけれど、どうぞ父様や母様に、逢ひたい顔が見たい、それで方方を尋ねて歩くのでございます。」



父様の名は阿波、十郎兵衛、母様はお弓と申します。」と、聞いて恟りお弓は取付き、「これ〳〵、あの父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの年別れて、祖母様に育てられてゐた。」とは疑もない我が娘と、見れば見るほど稚顔、見覺えのある額の黒子。やれ我が子か懐

かしやと、言はんとせしがいや待て暫し。夫婦は今にも取らるゝ命、もとより覺悟の身なれども、親子といはばこの子にまで、どんな憂き目がかゝらうやら。それを思へばなまなかに、名乘だてして憂き目を見んより、名乘らでこのまゝ返すのが、却つてこの子のためならんと、心を靜めよそ〳〵しく、おゝ、それはまあ〳〵、年はも行かぬに遙々の、處をよう尋ねに出さしやつたのう。その親達が聞いてなら、さぞ嬉しうて〳〵、飛び立つやうにあらうが、まゝならぬが世の憂き節、身にも命にも代へて、かはいゝ子を振棄て、國を立退く親御の心、よく〳〵のことであらうほどに、むごい親と必ず〳〵恨まぬがよいぞや。「いえ〳〵勿體ない。何の恨みませう。恨むることはないけれども、小さい時別れたれば、父樣や母樣の顏も覺えず、餘所の子供衆が、母樣に髮結うて貰うたり、夜は抱かれて寢やしやんすを見ると、わたしも母樣があるなら、あのやうに髮結うて

取らるゝ命　主君の重寶國次の刀を紛失させたがもとで。

貰はうものと、羨しうござんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい。ひよつと逢はれまいかと思へば、それが悲しうござんす」と、泣いじやくりするいぢらしさ。

母は心も消え入る思。「さても〳〵世の中に、親となり子と生るゝほど、深い緣はなけれども、親が死んだり子が先立つたり、思ふやうにならぬが浮世。此方どれほど尋ねても、顏も處も知らぬ親たち、逢はれぬ時は詮ないこと、もう尋ねずと、國へ往んだがよいわいの。」「いえ〳〵、戀しい父樣や母樣、たとひいつまでかゝつてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しいことは一人旅ぢやてて、どこの宿でも泊めてはくれず、野に寢たり山に寢たり、人の軒の下に寢ては擲かれたり、こはいことや悲しいこと。父樣や母樣と一緒にゐたりや、こんな目には逢ふまいものを。どこにどうしてゐやしやんすぞ。逢ひたいことぢや逢ひたい。」と、わつと泣き出す娘より、見る母親は堪り

かね「おゝ、道理ぢや、かはいやいぢらしや。」と、我を忘れて抱きつき、前後正體なげきしが、これほど親を慕ふを、なんとこのまゝ往なされう。いつそ打明け名乘らうか。いやゝ、それではこの子も同じ罪。その時の悲しさを思ひ廻せば、往なすが爲と、「おゝ、段々の樣子を聞き、我が身のやうに思はれて、悲しいとも情ないとも、言ふに言はれぬことながら、とかく命が物種、まめでさへゐりや、また逢はれまいものでもない。これ、仕つけぬ旅に身を痛め、煩でも出りや惡い。どこを證據に尋ねうより、その祖母樣の方へ往んで居るとの、追つつけ父樣や母樣が、逢ひにいてぢやほどに、惡いことは言はぬ、思ひ直してこれからすぐに、國へ往んで隨分まめで、親達の尋ねて行かしやるのを待つて居るのがよいぞや。」と、宥め賺せば聽き分けて、「あい〳〵、忝うござります。お前がそのやうに言うて、泣いて下さりますによつて、どうやら母樣のやうに思はれて、わたしやこゝ

いて　いかしやつて　とあるべきところである。

が往にとむない。どんなことなと致しませうほどに、申し御家樣、お前のお側にいつまでも、わたしをおいて下さりませ。」「えゝ、悲しいこと言ひ出して、また泣かすのかいの。先にからわしも子のやうに思うて、こゝにおきたい往なしとむないと、樣々思ひ廻せども、こゝにおいてはどうも爲にならぬことがあるによつて、それでつれなう往なすのぢやほどに、聽き分けて往んだがよいぞや。」と、いひつゝ內へはり箱の、底を探して豆板の、まめなを悅ぶ餞別と、紙に包んで持つて出で、「これ、なんぼ一人旅でも、たんと錢さへやりや泊める。僅かなれども志、この銀を路銀にして、早う國へ往にや。必ず必ずわづらうてばしたもんな。」と、銀を渡せば押戻し、「嬉しうござんすれど、銀は小判といふものをたんと持つて居ります。そんなりやもう參じます。忝うござります。」と、泣く〳〵立つを引留め、「それはさうでもこれはわしが志。」と、無理に持たして塵打拂ひ、「これ、もう

むもといふべきを訛つたのである。

往にやるか。名殘が惜しい、別れとむない。これ今一度顏を」と引寄せて、見れば見るほど胸迫り、離れがたなき憂き思。それと知らねど誠の血筋、名殘惜しげに振返り、「どこをどうして尋ねたら、父樣や母樣に逢はれることぞ。逢はしてたべ、南無大悲の觀音樣。」「父母のめぐみも深き粉川寺、佛の誓たのもしきかな」。泣く〳〵別れ行く……。

二三　落花の雪

落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明すほどだにも、旅寢となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、我が古里の妻子をば、行方も知らず思ひおき、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞあはれなる。

交野　河内國、「また見ん交野のみの櫻狩花の雪散る春の曙。」（藤原俊成、新古今集）

嵐の山　朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき。（藤原公任、拾遺集）

憂きをばとめぬあふ坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、冲を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮き沈み、駒もとゞろと踏み鳴す、勢多の長橋打渡り、行きかふ人にあふみ路や、世を、うねの野に鳴くたづも、子を思ふかと哀れなり。時雨もいたくもり山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見え分かず。物を思へば夜の間にも、おいその森の下草に、駒を駐めて顧みる、故郷を雲や隔つらん。

番場醒が井、柏原、不破の關屋は荒れ果てて、なほ漏るものは秋の雨、いつか我が身のをはりなる、熱田の八劒伏し拜み、汐干に今やなるみ潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくとほたふみ、濱名の橋の夕汐に、曳く人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰かあはれと夕暮の、いりあひなれば今はとて、池田の

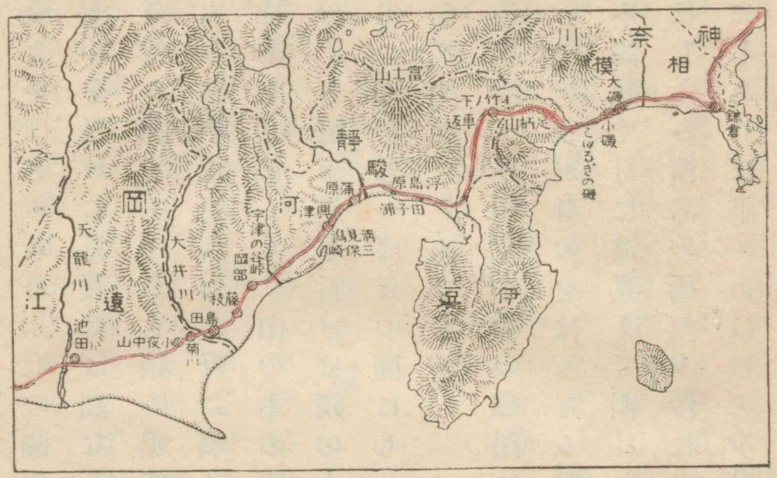
關の清水　逢坂の關の清水に袖ぬれて今やひくらん望月の駒。（紀貫之、拾遺集）

駒もとゞろと　貢物たえずそなふる東路の勢多の長橋音もとゞろに。（平兼盛、風雅集）

うねの野　近江より朝立ち來ればうねの野にたづぞ鳴くなるあけぬこの夜は。（大歌所の歌、古今集）

時雨も　白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり。（紀貫之、古今集）

不破の關屋　人住まぬ不破の關屋の板庇荒れにし後はたゞ秋の風。（藤原良經、新古今集）



宿に着き給ふ。

元*暦元年の頃かとよ、重*衡中將の東夷のために囚はれて、この宿に着き給ひしに、

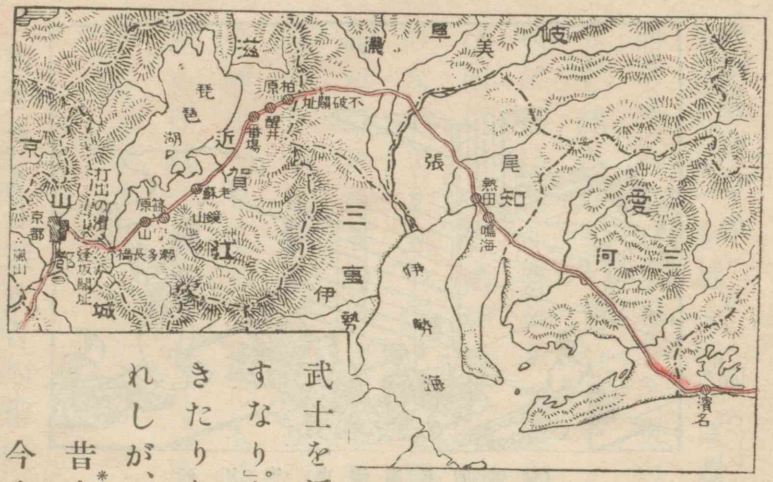
東路の埴生の
小屋のいぶせきに
ふるさといかに
戀しからんら

と、宿の主人が詠みたりし、その古のあはれまでも、思ひのこさぬ涙なり。旅館の燈幽かにして、雞鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲道を埋

なるみ潟　打渡す今か汐干に鳴海潟とをよる舟の聲も通はず。（常磐井入道、夫木集）

元暦元年　一八四四年。

重衡　平清盛の子、壽永四年（一六四五）歿、年二十九。



み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「*命なりけり。」と詠じつゝ、再び越えし跡までも、羨しくぞ思はれける

隊行く駒の足早み、日既に亭午に上れば、乾飯進らするほどとて、輿を庭前に舁き止む。　轅を敲きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承*久の合戰の時、院宣書きたりし咎によりて、宗*行卿關東へ召し下されしが、この宿にて誅せられし時、

昔南*陽縣菊水　汲下流而延齡
今東海道菊川　宿西岸而終命

命なりけり　年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山。（新古今集）

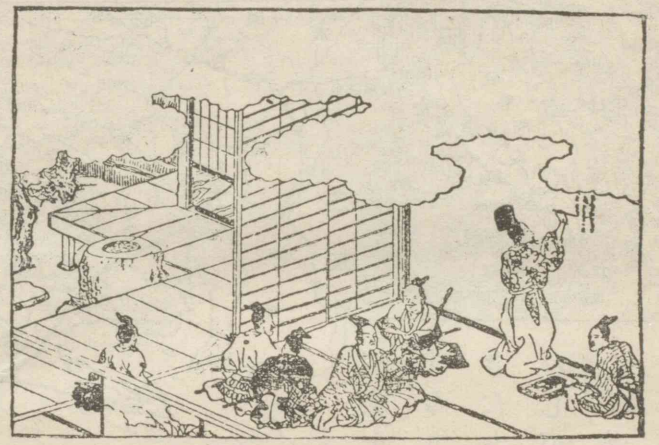
承久の合戰　承久三年。（一二二一）

宗行卿　中御門中納言藤原宗行。

南陽縣　支那南陽縣の故事、上流に菊があつて、その滴が流に落ち、それを飲むと長壽を保つといふ。

と書きたりし、遠き昔の筆のあと、今は我が身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしをきく川の
　　おなじ流に身をや沈めん



菊川宿（東海道名所圖會）

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、*亀山殿の行幸の、嵐の山の花盛り、龍頭鷁首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は再び見ぬ夜の夢となりぬと思ひ続け給ふ。

島田・藤枝にかゝりて、*岡べの眞葛うら枯れて、ものがなしき夕暮に、

亀山殿　嵯峨の亀山離宮、今の天龍寺。

岡べの眞葛　歸り來るほどはなけれど朝露の岡部の眞葛うら枯れにけり。（藤原爲家）

宇都の山べを越え行けば、蔦・楓いと繁りて道もなし。昔業平の中將の、すみかを求むとて、東の方へ下りて、「*夢にも人に逢はぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。*清見潟を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、むかひはいづこ三穂が崎、興津・蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪のなかより立つ煙、*上なき思にくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、潮干や淺き舟浮けて、*下り立つ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへし、竹の下道行き惱む、足柄山の峠より、大磯・小磯見下して、袖にも波ほこ*ゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數つもれば*七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ着き給ひけれ。（太平記）

二四　東海道五十三次

笹川臨風

夢にも人に　駿河なるうつの山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり。（伊勢物語）

清見潟　清見潟浦風寒き夜なゝゝは夢もゆるさぬ浪の關守。（院大納言典侍、新後撰集）

上なき思　富士のねの煙はなほも立ちのぼる上なきものは思なりけり。（藤原家隆。新古今集）

下り立つ　袖ぬるゝこひぢとかつは知りながら下り立つ田子の自らぞうき。（源氏物語）

こゆるぎの　こゆるぎのしたちならそたちならしぬらすなめざし磯菜つむめざしなる沖に居れる波。（古今集、相模歌）

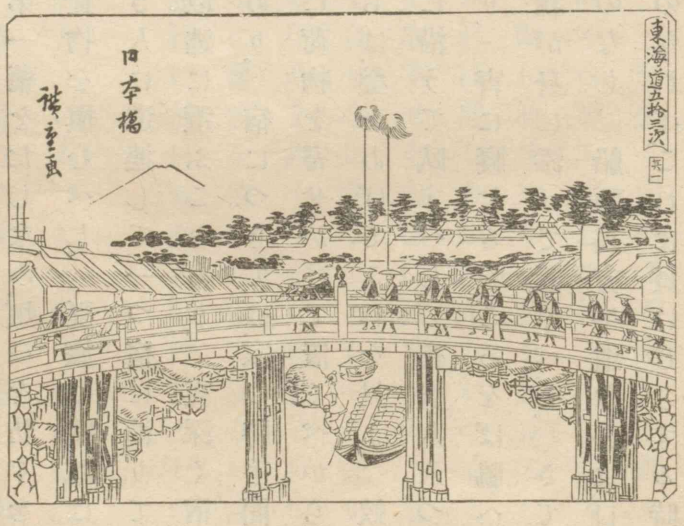
七月二十六日　後醍醐天皇元弘元年。

振出しは日本橋、上りは京、一つ餘れば大津へ戻る。島田・金谷は川の間、間の土山雨が降つて、いづれもお休みの道中双六。名物は府中の安倍川餅、小夜の中山飴、日坂の蕨餅、鞠子のとろゝ汁、草津の姥が餅。百三十里の長亭・短驛、參勤交替の大道路、東に箱根八里の險、中途に大井・天龍・荒井の渡しがある。交通機關は駕籠に輕尻馬、川越しには蓮台・肩車と極つてゐて、さて護摩の灰に取りつかれては、どうして撒かうかと胸算段並々ならず、雲助の無心、足弱の道連、長雨の川止、旅館の蛋・蚊などの難儀は、もとより食堂付寢臺列車で煙草を薫らしながら、なんの苦もなく駛走する今日からは、到底夢想し得られないが、松並木の街道で、金紋先箱の大名行列に、奴が振る毛槍の穗が春風に靡いた太平の光景は、またとないよい圖畫だつた。旅行く人の心も長閑かに、本陣・脇本陣の夕暮の賑ひ、十三泊の十四日入りで、行く先々の名所舊蹟を探りながら、名物に旨い物な

笹川臨風　名は種郎、東京市の人、明治三年生、文學者。
島田　駿河國。
金谷　遠江國。
土山　近江國。
府中　今の靜岡市。
小夜の中山　遠江國。
日坂　同國。
鞠子　駿河國、宇都山。
草津　近江國。
大井川　島田と金谷との間を過ぎて駿河灣に注ぐ、長さ四十六里。
天龍川　掛塚で海に注ぐ、長さ五十五里。
荒井の渡し　濱名湖の渡し。

しとはいへ、宿々の珍味に舌鼓を打つたのは、所謂往時の東海道の旅行情調だつた。「お泊りならば泊らんせ」の聲喧しい宿場々々の繁昌は、春風秋雨三百年間、海内交通大動脈の盛觀だつた。

東關紀行・海道記の昔はさておき、江戸時代に於ける東海道道しるべの最初の重な書物は、東海道名所記である。これは淺井了意の作と傳へられてゐて、一九の膝栗毛に少からぬヒントを與へたもので、萬治元年の作である。萬治といふと、四代將軍家綱の時で、德



昔の日本橋（歌川廣重筆）

淺井了意　京都の人、德川初期の戯作者、寛永六年（一六二九）歿、年七十。
一九　本名重田貞一、十返舍と號する、德川末期の戯作者、天保二年（一八三一）歿、年五十七。（或は六十八といふ）
萬治　後西院天皇の年號。（一六五八―一六六〇）
家綱　家光の長子、延寶八年（一六八〇）歿、年四十。

川時代の初期に屬する。隨つて東海道も後世のやうに十分開けてゐず、諸事不便だつた。「旅には第一藥をたしなみ、煩ひを防ぐを肝要とす。菓・冷水、むざとしたる食物を愼むべし。夏旅の霍亂は多くは食傷より起るなり。怪しき人に道連して、一つ宿に泊りて、荷物をすりかへられ、寢たる間に取逃に遭ふことあり。夜深く宿を出でぬれば、山だち・辻切の氣遣あり。宿につきては、家の勝手、間道の要害見おくべし。座敷の壁に荷物を寄せかけて置くべからず。疊の落込みて柔かなる處あらば、疊をあげてこれを見よ。蚊帳の中よりは片脇に立ちより、壁に沿うて臥すべし。夜、盜人入つて、釣手を切り押包む時の用心なり。宵に寢たるところをば、脇へ替へて寢なほれ。太刀は柄口を我が身に添へて置くべし。さて第一の用心には堪忍にまさるものなし。船頭・馬方・牛遣などは、口がましく言葉鄙しう我儘なるものなれば、これに負けじとする時

は、必ず大事の基となる。金錢を二三文多く使へば、万事早く調ふなり。扇・笠・巾着も高きところに置くべからず、忘れ易きものなり。旅籠錢は宵に渡すべからず、朝立つ時に渡すべし。錢を替ふるには、金錢を手放し、人を賴みて遣しぬれば、惡しき銀にふりかへらることあり。しるしを見せて錢を取寄せ、その後に渡すべし。道の左右に神や佛の堂社あらば、手を合せ心に念じて通るべし、守りの神となり給ふなり。」などと、旅行の用心を說くほどに物騷であつた。必ずしも萬治頃だけがこんなに警戒を要したのではない、江戸時代を通じて、かやうな戒心は旅行に於ける必要條件だつたのである。

萬治頃の東海道では、馬の少い處が方々にあつた。「品川*・原*・蒲原・江尻などは、いづれも馬少し。」とあり。「殊に原は道中一番の惡しき處なり。」といひ、蒲原は、「こゝは甚だ馬の不自由なる處なり。殊に乘掛

品川　武藏國。
原・蒲原・江尻　駿河國。

の旅人には宿を借さず、たとひ宿借すとも、旅籠錢他所より一倍高し。その故に、宿の中に馬なし。もし馬を借らんといへば、宿より宿の問屋に案内をいうて、問屋の手形をとり、一里も二里もわき在郷へ馬を借りに行く故に、むづかしがるなり。これ問屋の悪しき故なりと、處のものいふなり。」と記してある。小夜の中山には深夜の旅行を戒め、酒匂*には「追剝多し、夜深に出づべからず」とある。鈴*が森でも、「用心わろき道なれば、夜深く行くを慎むべし」と注意するほどに、江戸近くにも拘らず危險區域だつた。

東海道五十三次に關する古往今來の書籍・圖畫は、その數を知らないほどに澤山あるが、どうしても廣重*畫の五十三次と、一九の膝栗毛とに止めを刺すといはねばならない。廣重といへば五十三次を聯想し、五十三次といへば廣重を思ひ出す。また一九といへば東海道中膝栗毛、東海道中膝栗毛といへば一九といはれるほどに、

酒匂　相模國。
鈴が森　武藏國。
廣重　通稱安藤德兵衞、一立齋、德川末期の浮世繪師、安政五年（一八五八）歿、年六十二。

いづれも高名なものである。

二五　新古今集の歌

太上天皇

ほのぼのと春こそ空に來よけらし
　天の香具山かすみたなびく

式子内親王

足引きの山もゆくもの水ぬるむ瀬川
　ゆふべの秋と何おもひけん

宮内卿

山深み春とも知らぬ松の戸に
　絶えぬかゝる雪の玉ぼこ

太上天皇　後鳥羽天皇、延應元年（一二三九）崩御、御年六十三。
式子内親王　後白河天皇の皇女。
宮内卿　後鳥羽天皇の宮女、歌人。

うゑくさき壁生の緑はえ芽ぐみ
あさまだき見ゆる雲のむらぎえ

攝政太政大臣

うちしきりあやめぞかなる杜鵑
鳴くや五月はれ雨のゆふぐれ

人住まぬ石破乃関屋の板びさし
荒まさしく後ぞ秋の風

皇太后宮大夫俊成

駒ぞ鳴くなほ水のほん山吹乃
花のつゆそふ井出の玉川

藤原定家朝臣

政攝太政大臣　藤原良經、建永元年（一八六）歿、年三十八。

俊成　藤原氏、千載集撰者、元久元年（一八四）歿、年九十一。

藤原定家　俊成の子、新古今集撰者、

見渡せば花も紅葉もなかりけり
浦乃苫屋の秋はゆふぐれ

藤原家隆朝臣

須磨乃浦や遠ざかり行く海原を
こぎ出でて見るあり明の月

従四位頼政

庭乃おもはまだ残の如に夕立の
空さだめなく降る月かな

西行法師

花乃色に清水流るゝ柳かげ
暫しとてこそ立ちどまりつれ

能因法師

仁治二年（一九〇）歿、年八十。

藤原家隆　新古今集撰者、嘉禎三年（一八七）歿、年八十。

頼政　源氏、治承四年（一四〇）歿、年五十一。

西行法師　俗名佐藤義清、建久元年（一八五〇）歿、年七十三。

能因法師　俗名橘永愷（ながやす）、諸兄十世の孫、後鳥羽天皇の頃の人。

山里の春乃ゆふぐれ来て見るぞ
いりあひの鐘よ花ぞ散るけり　寂蓮法師

和歌の浦塩干潟に眺むれば
こずゑよ霞まるあまの釣舟　前大僧正慈圓

有明乃月の影方をなごめてぞ
聖寺山鐘をきくぞ哀なりける　僧正遍昭

夫恋乃露もとの雫や世の中は
たくるまさきだつるあしたかるらん　鴨長明

寂蓮法師　俗名藤原定長、俊成の甥、建仁二年（一二〇二）歿。

慈圓　慈鎮和尚、嘉祿元年（一二二五）歿、年七十一。

僧正遍昭　俗名良峰宗貞、寛平二年（一八九〇）歿、年七十五。

鴨長明　和歌所寄人、

石川やせゝらぎの小川乃清きをぞ
月もすゞれを洗ねてゝぞすむ　近松門左衛門

二六　錦祥女　その一

表に轟く馬・車、御歸館と呼はつて、唐櫃先に舁き入れさせ、いう〳〵たる絹笠も、さすが五常軍甘輝と名におふその物體。錦祥女出迎へ「何とて早き御退出、御前は何と候ぞや。」「さればこそ、韃靼大王叡感深く、過分の御加增、十万騎の旗頭、散騎將軍の官に任ぜられ、諸侯王の冠・裝束賜はり、大役仰せ付けらるゝ、家の面目これに過ぎず。」とありければ、「それはお手柄めでたい〳〵。」のう、家の吉事は重なるもの、日來戀しい床しいと申し暮せし父上、日本にて設け給ひし母・兄弟・賴みたきことありとて門外まで來り給へども、お留守といひ、嚴しき國の掟を憚り、男子は皆還し、母上ばかりを留めおきしがな

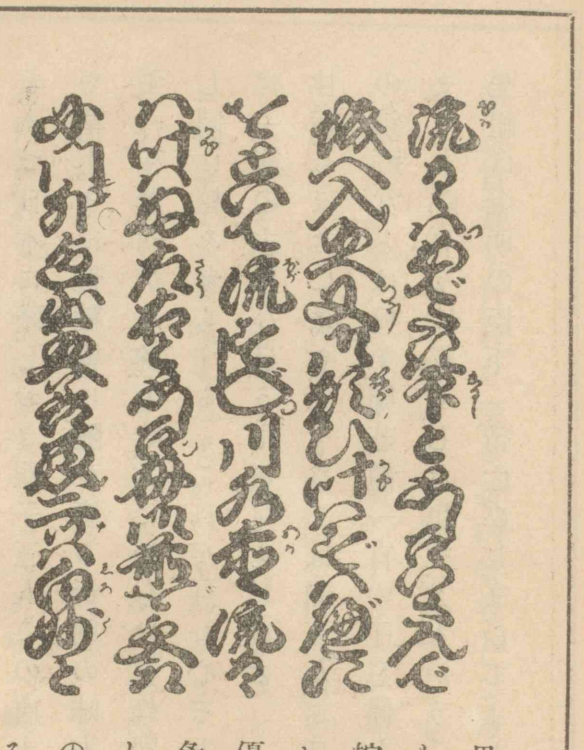
方丈記の著者、建保四年（一二一六）歿、年六十三。

近松門左衛門　本名杉森信盛、長門國の人、德川中世の淨瑠璃作者、享保九年（一七二四）歿、年七十二。

ほも上への聞えを恐れ、纒をかけて、あれ、あの奥の亭にて御馳走は申せども、胎内借らぬ母上、繩かけし御心底、悲しさよ」とぞ語りける。

「うゝ、繩かけしはよい了簡。上へ聞えて言譯あり。隨分もてなせ。いざまづ我も對面せん、案内申せ」といふ聲の、漏れ聞えてや妻戸のうち、「のう錦祥女、甘輝殿のお歸りか。こゝはあまり高あがり、わらはそれへ」と立ち出づる、形はいとゞ老木の松の、しめからまれし藤葛、起居苦しきその風情。甘輝見る目もいたはしく、

「まこと世の中の子といふものあればこそ、山川万



此城つ上の殿のはたる堀の荘落は成聞りに
ほ　　　　　　　
の　　　　　　　
廻　　　　　　　
り　　　　　　　
に　　　　　　　

水ひるる黄流夫流入就い川
白流くすべしと
白願輝筋甘水の水の川の庭自分が末な水の水甘御ばひ粉
白願輝筋甘水の水の川の庭自分が末な水の水甘御ばひ粉
白願輝筋甘水の水の川の庭自分が末な水の水甘御ばひ粉
白願輝筋甘水の水の川の庭自分が末な水の水甘御ばひ粉
白願輝筋甘水の水の川の庭自分が末な水の水甘御ばひ粉
白願輝筋甘水の水の川の庭自分が末な水の水甘御ばひ粉

里を越えたまふ、その甲斐もなきいましめは、時世の掟是非もなし。それ女房、お手が痛むか氣を付けよ。優曇華のまれ人、いさゝか麁略を存ぜず。何事なりともこの甘輝が、身に相應のことならば、必ず心おかるな」と、世に睦じくもてなせば、老母顔色打解けて、「おゝ頼もしい忝い。その詞を聞くからは、なにしに心おくべきぞ。頼み入りたき大事、密かに語り申したし、これへ〳〵」と小聲になり、「のう、我々このたび唐土へ渡りしこと、娘ゆかしいばかりでなし。去年の初冬、肥前の國松浦が磯といふと

流たきるは白妙二つ迄は給へ出召へ願ひ入給さんで又御城御ぱ川水てば川水は とは前門善惡と思を受取に御左右ゝ
流たきるは白妙二つ迄は給へ出召へ願ひ入給さんで又御城御ぱ川水てば川水は とは前門善惡と思を受取に御左右ゝ
流たきるは白妙二つ迄は給へ出召へ願ひ入給さんで又御城御ぱ川水てば川水は とは前門善惡と思を受取に御左右ゝ
流たきるは白妙二つ迄は給へ出召へ願ひ入給さんで又御城御ぱ川水てば川水は とは前門善惡と思を受取に御左右ゝ
流たきるは白妙二つ迄は給へ出召へ願ひ入給さんで又御城御ぱ川水てば川水は とは前門善惡と思を受取に御左右ゝ
流たきるは白妙二つ迄は給へ出召へ願ひ入給さんで又御城御ぱ川水てば川水は とは前門善惡と思を受取に御左右ゝ

ころへ、大明の帝の御妹栴檀皇女、小船に召され吹き流され、御代を韃靼に奪はれし御物語、聞くとひとしく、父はもとより明朝の陪臣。我が子の和藤内と申すもの、賤しき海士の手業ながら、唐土・日本の軍書を學び、韃靼大王を亡し、昔の御代に飜し、姫宮を帝位に即けんと、まづ日本に殘しおき、親子三人この唐土へは來たれども、淺ましや、草木まで皆韃靼に隨ひ靡き、大明の味方に志すもの一人も候はず。　和藤内が片腕の味方に賴むは甘輝殿。　力を添へて下されかし、偏に賴み參らする。」　これが拜む心ぞと、額を膝に押下げ〳〵、たゞ一筋の志、思ひ込うでぞ見えにける。

甘輝おほきに驚き、「うゝ、さては聞き及ぶ日本の和藤内と申すは、この錦祥女とは兄弟、鄭芝龍一官の子息候な。　うゝ、武勇のほど唐土までも隱れなく、賴もしき思立、尤もかうこそあるべけれ。　我等も先祖は大明の臣下。　帝亡びたまひてより、賴むべき主君なく、韃靼

の恩賞蒙り、月日を送る折柄、望むところの御賴、早速味方と申したきが、少し存ずる旨あれば、急にあつとも申されず。　とつくと思案し御返事を。」と、いはせも果てず、「おう、そりや御卑怯な。　詞がちがふ。これほどの一大事、口より出せば世間ぞや。　思案の間に漏れ聞えて不覺を取り、悔んでも返らず。　お恨とは思ふまじ、成れ、成らざれ、お返事をさあ唯今。」とせめつくれば、「うゝ、急に返答聞きたくば、易いこと〳〵。　いかにも五常軍甘輝、和藤内が味方なり。」といふより早く錦祥女が、胸元取つて引寄せ、劒拔いて喉笛に差當つる。

老母あわてて飛びかゝり、二人が中へ割つて入り、持つたる手を踏み放し、娘を背中に押遣り〳〵、仰向けに重なり臥し、大聲あげて、「これ情なや、何事ぞ、人に物を賴まれては、女房を刺し殺すが唐土の習か。　心に染まぬ無心を聞くも、女房の緣あるゆゑと心腹が立つてのことか、たゞしは狂氣か。　偶、始めて來て見たる、母親の目の前で

殺さうとする無法人。日々が思ひ遣られた。味方をせずばせぬまでよ。今までと違うて、親のある大事の娘。これ恐いことはない、母にしつかと取りつきや。」と、隔ての垣と身を捨てて、かこひ歎けば錦祥女、夫の心は知らねども、母の情の有難さ、「怪我遊ばすな。」とばかりにて、ともに涙に咽びけり。

甘輝飛びしさつて、「おゝ御不審御尤。全く某無法にあらず、狂氣にも候はず。昨日韃靼王より某を召し、この頃日本より和藤内といふ似而非者、小僕下劣の身を以て、智謀軍術逞しく、韃靼王を傾け大明の、世に飜さんとこの土に渡る。彼が討手誰ならんと、數千人の諸侯の中より、この甘輝を選び出され、散騎將軍の官に任じ、十万騎の大將を賜はる。和藤内を我が妻の兄弟と、今聞くまでは夢にも知らず。彼奴日本に傳へ聞く、楠とやらんが肝膽を出し、朝比奈・辨慶とやらんが勇力あるとも、我また孔明が腸に分け入り、樊噲・項羽

が骨髓をかつて、一戰に追つて追ひまくり、和藤内が月代首ひつさげて來らんと、廣言吐きし某が、一太刀も合せず矢の一本も放さず、ぬく〳〵と味方せば、五常軍甘輝が日本の武勇に聞きおぢするものでなし、女に絆され緣に引かれ、腰が拔けて弓矢の義を忘れしと、韃靼人の雜口にかけられんは必定。しからば、子孫末孫の恥辱脫れがたし。恩愛不便の妻を害し、女の緣に引かれざる、義信の二字を額にあて、さつぱりと味方せんため。やい錦祥女。留むる母の詞には慈悲心こもり、殺す夫の劍の尖には忠孝こもる。親の慈悲と忠孝とに、命を捨てよ女房。と、理非を飾らぬ勇士の詞。「おゝ聞き分けた。身に叶うた忠孝。親に貰うたこの體、孝行のために捨つるは惜しいとは思はぬ。」と、母を押しのけつゝと寄り、胸押明くれば引寄せて、見る目危き氷の劍。「のう、悲しや。」とかけ隔て、押別けんにも詮方なく、退けんとするに手は叶はず。娘の袖に喰付いて、引退

くれば夫が寄る、夫の袖をくはへて引けば、娘は死なんとまた立寄るを、口にくはへて唐猫の、塒を替ふる如くにて、母は目もくれ身も勞れ、わつとばかりにどうと伏し、前後不覺に見えければ、錦祥女縋りつき、「一生に親知らず、つひに一度の孝行なく、なんで恩を送らうぞ。死なせてたべ母上」と、くどき歎けばわつと泣き、のう、「悲しいこといふ人や。殊に御身は娑婆と冥途に親三人。殘り二人の父母は、產み落したる大恩あり。中に一人のこの母は、憐みかけず恩もなく、うたてや繼母の名は削つても削られず。今こゝで死なせては、日本の繼母が三千里隔てたる唐土の繼子を惡んで、見殺しに殺せしと、我が身の恥ばかりかは、普く口々に、日本人は邪慳なりと、國の名を引出すは、我が日本の恥ぞかし。唐を照す日影も、日本を照す日影も、光に二つはなけれども、日の本とは日の始、仁義五常情あり、慈悲專らの神國に、生を享けたるこの母が、娘殺すを見物し、そも

生きてゐられうか。願はくはこの縄が、日本の神々の注連縄と顯れ、我を今絞め殺し、屍は異國に曝すとも、魂は日本に導き給へ」と聲をあげ、道もあり情もあり、哀れも籠るくどき泣き。

錦祥女は縋りつき、母の袂の諸涙。甘輝も道理に至極して、坐ろ涙にくれけるが、やゝあつて甘輝席を打つて、「はつあ是非もなし力なし。母の承引なき上は、今日より和藤内とは敵對。老母をこれに留めおき、人質と思はれんも本意ならず。輿・車用意して、處を尋ね送り還し參らせよ」。「いや送るまでもなく、この遣水より黃河まで、吉き便りには白粉流し、叶はぬ知らせは紅を流す約束にて、迎へにお出でであるはず。いで紅溶いて流さん」と、常の一間に入りにけり。

二七　錦祥女　その二

母は思にかきくれて、思ふに違ふ世の中を、立ち歸りて夫や子に、な

んと語り聞かせんと、思ひやる方なみだの色、紅より先の唐錦。錦祥女はその隙に、瑠璃の鉢に紅溶き入れ、これぞ親と子が渡らぬ錦中絶ゆる、名殘は今ぞと夕波の、泉水にさら〳〵。落ちたぎつ瀨の紅葉と、浮世の秋を堰きくだし、ともに染めたる泡沫の、紅くゝる遣水の、落ちて黃河の流の末。和藤內は巖頭に蓑打被き座を占めて、赤白二つの川水に、心をつけて水の面。「南無三寶紅が流るゝ。さては望は叶はぬ。味方もせぬ甘輝奴に母は預けおかれず。」と、踏み出す足の早瀨川、流を止めて行先の、堀を飛び越え塀を乘り越え、籬・透垣踏み破り、甘輝が城の奧の庭、泉水にこそ着きにけれ。まづ母は安穩嬉しやと飛び上り、縛の繩引きちぎり、甘輝が前に立ちはだかり、「五常軍甘輝といふ髭唐人は和主よな。天にも地にもたつた一人の母に繩かけたは、おのれをおのれと奉つて味方に賴まんためなるに、もつてうすれば方圖もない。味方にならぬはこ

の大將が不足なか。第一女房の緣といひ、其方から從ふはず。さあ日本無双の和藤內が、ぢきに賴む返答せい。」と、柄に手をかけ突つ立つたり。「おゝ女房の緣といへばなほならぬ。御邊が日本無双なれば、我は唐土稀代の甘輝。女に絆され味方する勇士にあらず。女房を去る處もなし、病死するまでべん〳〵とも待たれまい。追て風次第はや歸れ。たゞし置土產に首がおいて往きたいか。」「いやさ日本の土產にうぬが首を。」と、兩方拔かんとするところを、錦祥女聲をかけ、「あゝ〳〵これのう病死を待つまでもなし。たゞ今流せし紅の水上を見給へ。」と、衣裝の胸を押開けば、九寸五分の懷劍、乳の下より膽先まで、橫に縫うて差通し、朱に染みたるその有樣。母はこれはとばかりにて、かつぱと伏して正體なし。和藤內も動轉し、覺悟を極めし夫さへ、坐ろに驚くばかりなり。錦祥女苦しげに、「母上は日本の國の恥を思召し、殺すまいとなさるれど、我が命を惜し

みて親兄弟を貢がずば、唐土の國の恥と、かうなる上は女に心ひかさるゝ、人の誹はよもあるまじ、のう甘輝殿、親兄弟の味方して、力ともなつてたべ、父にもかくと告げてたべ。もう物いはせて下さるな、苦しいわいの。」とばかりにて、消えぐ〳〵とこそなりにけれ。

甘輝涙を押隱し、「おゝ、でかいた〳〵。自害を無にはさせまい。」と、和藤内が前に頭を下げ、「某先祖は明朝の臣下。進んで味方申すべき身の、女の縁に迷ひしと俗難を憚りしに、我が妻たゞ今死を以て義を勸むる上は、心清く御味方。大將軍と仰ぎ、諸侯王に準へ、御名を改め延平王國性爺鄭成功と號し、裝束めさせ奉らん。」と、武運開くる唐櫃の、二重の錦、羅綾の袂、緋の裝束、章甫の冠、花紋の沓、珊瑚・琥珀の石の帶、莫耶の劍金を磨き、絹笠さつとさしかくれば、十万餘騎の軍兵ども、幢の旗、幡の旗、吹拔・たて鉾・弓・鐵砲、鎧の袖を列ねしは、會稽山に越王の、再び出でたる如くなり。母は大聲高笑ひ、「あゝ嬉しや本

望や。あれを見や錦祥女。御身が命を捨てしゆゑ、親子の本望達したり。親子と思へど天下の本望。この劍は九寸五分なれど、四百餘州を治むる自害。この上に母が存へては、始の詞虚言となり、再び日本の國の恥を引起す。」と、娘の劍をおつ取つて、咽喉にがばと突き立つる。人々これはと立ち騷げば、「あゝ寄るまい〳〵。」とはつたと睨み、「のう、甘輝・國性爺、母や娘の最後をも、必ず歎くな悲しむな。韃靼王は面々が、母の敵妻の敵と思へば討つに力あり。氣をたるませぬ母の慈悲。この遺言を忘るゝな。父一官がおはすれば、親には事を缺くまいぞ。母は死して諫をなし、父は存へ教訓せば、世に不足なき大將軍。浮世の思出これまで。」と、肝のたばねを一ゑぐり切りさばき、さあ錦祥女、こ

近松門左衛門

の世に心殘らぬか。「何しに心殘らん」と、いへども殘る夫婦の名殘。親子手を取り引寄せて、國性爺が出立を、見上げ見下し嬉しげに、笑顔を娑婆の形見にて、一度に息は絶えにけり。

鬼を欺く國性爺、龍虎と勇む五常軍、涙に眼は眩めども、母の遺言背くまじ、妻の心を破らじと、國性爺は甘輝を恥ぢ、甘輝はまた國性爺に恥ぢてしをるゝ顏かくす、亡骸をさむ道の邊に、出陣の門出と生死二つを一道の、母が遺言釋迦に經、父が庭訓鬼に鐵棒。討てば勝ち、攻むれば取る、末代不思議の智仁の勇士。玉ある淵は岸破れず、龍栖む池は水涸れず。かゝる勇者の出生す、國、國たり、君、君たる、日本の麒麟これなるはと、異國に武德を輝しけり。

吉田兼好

吉田兼好　姓は卜部、鎌倉末世の文學者、觀應元年

二八　徒然草抄

一　折節のうつりかはり

折節のうつりかはるこそ物ごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いまひとときは心もうきたつものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日かげに、垣根の草もえいづる頃より、やゝ春ふかく霞みわたりて、花もやう〳〵けしきだつほどこそあれ、をりしも雨風うちつゞきて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞなやまし。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅のにほひにぞ、古のこともたちかへり戀ひしう思ひ出でらるゝ。山吹のきよげに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすてがたきこと多し。

「灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行くほどこそ、世のあはれも人の戀ひしさもまされ」と、人の仰せられしこそげにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる頃、水雞のたゝくなど、心細からぬ

(一〇一〇)歿、年六十九。

物のあはれ　春はたゞ花の咲くにつけてのみ物のあはれは秋ぞ優れる。(讀人知らず、拾遺集)

花橘　五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。(讀人知らず、古今集)

梅のにほひ　色よりも香こそあはれと思ふれ。(讀人知らず、古今集)

祭　賀茂の葵祭。

人の戀ひしさ　わが宿の花見がてらに來る人は散りなんなごりこそ戀しかりける。(凡河内躬恒、古今集)

かは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕まつるこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、早稲田かりほすなど、取集めたることは秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。

吉田兼好

さて冬枯の景色こそ秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白うおけるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはて人ごとにいそぎあへる頃ぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして見る人もなき月の、寒けく澄める二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名*荷前*の使立つなどぞあはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとりかさねてもよほし行はるゝさまぞいみじきや。追儺*より四方拜*につゞくこそおもしろけれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで、人の門たゝき走りありきて、何事にかあらんことゞしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉がたよりさすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心細けれ。亡き人のくる夜とて魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方にはなほすることにてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそまたあはれなれ。

御佛名　十二月十九日から三日間佛名を唱へる公事。

荷前の使　年の末に十陵八墓に幣帛を奉らせられる勅使。

追儺　十二月晦日の夜に惡鬼を追ふ公事。

四方拜　元旦寅の時に天皇が四方及び山陵を拜し給ふ儀式。

二　猫また

「奥山に猫またといふものありて人を食ふなる。」と人のいひけるに、「山ならねども、これらにも猫のへあがりて猫またになりて、人捕ることはあなるものを。」といふものありけるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺のあたりにありけるが聞きて、一人ありかん身は心すべきことにこそと思ひける頃しも、或處にて夜ふくるまで連歌して、たゞひとり歸りけるに、小川のはたにて、音に聞きし猫また、あやまたず足もとへふと寄りきて、やがてかきつくまゝに頸のほどを食はんとす。きも心もうせて、ふせがんとするに力もなく、足もたゝず、小川へころび入りて、「たすけよや、ねこまた、よや、よや。」とさけべば、家々より松どもともして走りよりて見れば、このわたりに見しれる僧なり。「こはいかに。」とて、河の中よりいだき起したれば、連歌のかけものとりて、扇・小箱などふところに持ちたりけるも水に入りぬ。希有にしてたすかりたるさまにて、はふ〳〵家に入りにけり。飼ひける犬のくらけれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。

行願寺　京都一條賀茂神社の附近にあつた。

三　聖海上人

丹波に出雲といふ處あり。大社を遷してめでたく造れり。志太のなにがしとかや、知るところなれば、秋の頃、聖海上人その外も人數多誘ひて、「いざ給へ、出雲をがみに、かいもちひめさん。」とて、具しもていきたるに、各拜みて、ゆゝしく信を起したり。御前なる獅子・狛犬背きてうしろざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あな、めでたや、この獅子の立ちやういと珍し、深き故あらん。」と涙ぐみて、「いかに、殿ばら、殊勝のことは御覽じ咎めずや、むげなり。」といへば、各、

兼好筆蹟

出雲　南桑田郡。大社　出雲大社。

閑妙
かにほひ
なる道にあら
はれてみのり
の花や春をつ
ぐらん　兼好

あやしみて、「まことに他に異りけり。都のつとに語らん」などいふ。上人なほゆかしがりて、大人しく物識りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、定めて習あることに侍らん、ちと承らばや」といはれければ、「そのことに候、さがなきわらはべどもの仕りける、奇怪に候ことなり」とて、さし寄りて据ゑなほしていにければ、上人の感涙いたづらになりにけり。

四　人の心

人の心すなほならねば、僞なきにしもあらず。されどおのづから正直の人などかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚かなる人は、たまたま賢なる人を見てこれを憎む。おほきなる利を得んがために、少しきの利を受けず、いつはり飾りて名を立てんとすとそしる。おのれが心にたがへるによりて、このあざけりをなすにて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず、いつはりて小利をも辞すべからず。

かりにも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて大路をはしらば則ち狂人なり、悪人のまねとて人を殺さば悪人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。僞りても賢を學ばんを賢といふべし。

五　花と月

花はさかりに月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見どころおほけれ。歌の詞書にも、「花見にまかりけるに、はやく散りすぎにければ」とも、「障ることありてまからで」など書けるは、「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り月の傾くを慕ふならひはさることなれど、殊にかたくなる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり、いまは見ど

たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり。（藤原因香、古今集）

ころなしなどはいふめる。よろづのことは始終こそをかしけれ。望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、こゝろあらん友もがなと都こひしうおぼゆれ。すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

二九　新生活の開幕

生方敏郎

春は氣候もいゝ、景色もいゝ。郊外の道の並木に淡い緑の若葉が綻び初める頃は、なんともいへないいゝ季節だ。しかし、それがい

生方敏郎（うぶかた）　群馬縣の人、明治十五年生、文學者。

つまでもそのまゝ續くより、やがて夏となり秋と移り冬と變つてこそ、一年は面白いのだ。生々轉化、これが新しい生活だ。人の一生にもさま〴〵に有爲轉變があつてこそ、眞に生甲斐があるのだ。人は誰しもこの意味に於ての新しい生活を希望し、そしてその方へと向ふ。人が新しい生活を憧れ望む心の强さは、丁度朝顏の蔓が手のある方を探り求めていくのに似てゐる。知らず識らずの間にさへ、心は必ずその方へ向ふのだ。

新しい生活は、求めて與へられる場合もあり、求めないで與へられる場合もある。宗教改革の大先達マルチン、ルーテル*Martin Luther*は、初め法律の研究に志したが、一日友人とともに野中の道を歩いてゐた時、驟雨に襲はれて、友人は落雷のために死んだが、自分は助つた。その時、彼の新しい生活の道が開けた。そして彼は法律を捨てて宗教に入つた。パウロ*Paulo*はローマ*Rome*の役人だつたが、當時燎原の火のやう

ルーテル　ドイツの宗教改革創唱者。（1483-1546）

パウロ　使徒の一、キリスト教の宣傳者でまた偉大な思想家。

に國内に擴がりつゝあつたキリスト教を撲滅しようとして、その信者を捕へる目的でダマスコへ近寄つた。その時天に輝く光を見た。また「汝荊棘の鞭を蹴るは難し」といふ聲を聽いて、盲になつて、馬から地面に轉げ落ちた。この時、パウロの前には新しい生活が開けた。そして彼はキリストの使徒となつた。

イギリスの文豪サッカレーは、初め當時文壇の新進流行兒ディッケンスの門を叩き、その小説の挿繪を描きたいと申込んだが、跳ねつけられたので、發憤して、遂に彼自身がディッケンスに對抗すべき文豪となつた。貧弱平凡な挿繪畫家として失脚した刹那に、大文豪となるべき新生活の道が開けたのだつた。

人の生活は水と同じく、停滯すれば濁りもするし腐れもする。動いて止まず、激して反撥し、絶えず新方面を開拓していくのでなければ、到底活々とした生活は求め得られない。喜ばしいこと、それ

ダマスコ　シリヤの首府。

サッカレー　英國の小説家。(1811—63)

ディッケンス　英國の小説家。(1812—70)

にも新生活への道は見出されよう。しかし、最も多くの場合に於て、悲哀は人を新しい運命に導くものである。

三〇　女をよめる歌

天照大神　　本居宣長

わたの原島の八十神よもの國
ひかりあまねく天てらす神

小野小町　　小野務

六くさのみ人の折りつる秋の野の
はなにまじれる女郎花かな

清少納言　　石川依平

かきつめし雪の日かずの爭ひも
消えせで殘る筆のあとかな

小野小町　平安朝初期の歌人、六歌仙の一人。

小野務　備中國の人。

清少納言　一條天皇の皇后定子に仕へた、歌をよくし、また枕草子を著した、雪の日の爭のことは枕草子に見えてゐる。

石川依平　歌人、遠江國の人、安政六年(一八五九)歿、六十九。

紫式部　本居大平

むらさきの深き根ざしもかきつめし
そのまき〳〵に見ゆる言の葉

常磐御前　本居宣長

しら雪のかゝる憂身のなげきにも
こずゑの花さく春をこそ待て

楠木正行母　大國隆正

ちゝのみのちゝばかりかはゝそばの
散るべき時を子にをしへけり

紫式部　一條天皇の中宮上東門院に仕へた、源氏物語を著した。

本居大平　國學者、伊勢國の人、本居宣長の門人で養嗣子、天保四年（一八三三）歿、年七十八。

常磐御前　源義朝の妾、その子義經等の生命を全うさせた。

大國隆正　舊姓對馬口、國學者石見國津和野藩士、明治四年歿、年八十。

自修文

一　攝政

攝政（せつしやう）は天皇の名に於て天皇の大權を行ふ憲法上の機關である。即ち攝政は君主の代表機關で、その代表權の範圍は、君主大權の全部に及ぶものである。蓋し國家の政務は一日でもこれを空しくすることが出來ないから、君主が大權を親裁（しんさい）することが出來ない場合に、これに代るべき機關がなければならないが、君主の地位を動かすことは、君主たる地位と相容（い）れないから、君主は君主たる地位を失ふことなしに、君主の名に於て攝政が大權を行ふのである。

攝政を置くべき場合は皇室典範の定めるところに據（よ）るものであつて、これに二種ある。即ちその一は君主が成年に達しない場合で、その二は君主が

憲法上云々　攝政ヲ置クハ皇室典範ノ定ムル所ニ依ル攝政ハ天皇ノ名ニ於テ大權ヲ行フ。（憲法十七條）

親裁　自ら決する。

成年　滿二十歳、だし天皇・皇太子・皇太孫にあつては滿十八歳。

久しきに亙つて大政を親らすることの出來ない故障のある場合であるが、所謂久しきに亙る故障には一定の標準がなく、たゞ皇族會議及び樞密顧問の議決に據ることとなつてゐる。そして攝政は皇太子・皇太孫がこれに任じ、若し皇太子・皇太孫のない場合、またはその未成年の場合には、皇位繼承の順位に從ふのである。攝政就任の時には、賢所に祭典を行ひ、且就任の旨を皇靈殿に奉告する。攝政を置く必要の止む場合は、君主の崩御、未成年の君主の成年に達した時、及び君主が大政を親らすることの出來ない故障の除かれた時である。攝政を置く時、攝政

詔書

朕久キニ亙ルノ疾患ニ由リ大政ヲ親ラスルコト能ハサルヲ以テ皇族會議及樞密顧問ノ議ヲ經テ皇太子裕仁親王ヲ攝政ニ任ス茲ニ之ヲ宣布ス

御名御璽

攝政名

大正十年十一月二十五日

宮內大臣子爵　牧野伸顯

內閣總理大臣子爵　高橋是清

故障　さゝはり。

繼承　うけつぐこと。

賢所　宮中で、祖宗を祀り、神鏡を置かせられる御殿。

皇靈殿　宮中で、代々の天皇の御靈を祀らせられる御殿。

更迭の時、または攝政が止んで天皇が大權を親らする時には、詔書を以てこの旨を公布することになつてゐる。

攝政は大權を行ふ機關であるから、攝政の意志は君主の意志と同樣で、攝政が大權を行ふのは、憲法上君主がこれを行ふのと同樣になつてゐる。それゆゑ、攝政令第三條に「攝政ヲ置ク間御名ヲ要スル公文ハ攝政御名ヲ書シ且其ノ名ヲ署スルノ外天皇大政ヲ親ラスルトキト形式ヲ異ニスルコトナシ。」と定められてある。なほ憲法上では、第十七條以外別段の明文がないが、これは、攝政は君主の一部の大權を行ふものであるから、君主に關する憲法の條規を等しく攝政に適用するのを原則としてあるからである。たゞし、憲法第七十五條に「憲法及皇室典範ハ攝政ヲ置クノ間之ヲ變更スルコトヲ得ス。」と規定してあるが、これは攝政に對して加へられる唯一の制限で、非常な深慮に出たものである。

攝政は、支那では三代以前からその制度があつて、堯が舜を擧げて攝政としたのがその最初である。たゞし、それは天子が老年になつたので、人をして

更迭　入りかはり。

公布　一般に觸れ示す。

條規　條文の規定。

深慮　深い考。

三代　夏・殷・周。

令旨

皇上ノ御不例久キニ亙ラセラルルハ予ノ國民ト共ニ憂懼措カサル所ナリ今ヤ大政ヲ親ラシタマフコト能ハサルニ因リ予ハ成典ニ遵ヒテ攝政ト爲レリ是レ實ニ已ムヲ得サルニ出ツ方今國事多端ノ際予ノ弱齡寡德ヲ以テ此ノ重任ニ嚮ル夙夜兢々トシテ負荷ニ任ヘサラムコトヲ恐ル唯當ニ先皇維新ノ鴻謨ト　皇上紹述ノ宏規トヲ遵奉シテ勵精治ヲ求メ外ハ國交ヲ敦クシ內ハ國民ノ福祉ヲ增進センコトヲ期シ以テ　皇上御平癒ノ日ヲ待ツヘキノミ國民予カ斯ノ意ヲ體シ各〻其ノ業ヲ勤メ分ニ隨ヒテ公ニ奉シ上下心ヲ一ニシテ以テ國運ノ永昌ヲ圖ラムコトヲ望ム

政を攝しさせたもので、普通天子幼沖の場合に置かれるものとは違ふ。普通の攝政は、周の武王が死んで成王がまだ幼かつた時、周公がこれを輔けて政を攝したのが嚆矢だといはれてゐる。

我が國に於ては、仲哀天皇の崩御

幼沖　をさないこと。
嚆矢　はじめ。
仲哀天皇　第十四代。

後、應神天皇がまだ御幼沖であらせられた時、御生母の息長足姫皇后（神功皇后）が万機を攝行し給うたことが日本書紀に見えてゐるが、これが攝政の最初である。尤もこれは修史家の追記で、その當時には攝政といふ職名はなかつたのである。その後、推古天皇の御代に、皇太子厩戸皇子（聖德太子）が攝政となり、齊明天皇の御代に、皇太子中大兄皇子（天智天皇）が攝政となられた。即ち上古に於ては母后または皇太子を以て攝政とするの例だつた。

降つて清和天皇が九歲で即位し給うた時、外祖太政大臣藤原良房に攝政として天下の政治を攝行させられ、次いで貞觀八年八月、勅して万機のことを攝しさせられたのが人臣攝政の始である。その後、同十八年十一月、清和天皇が位を陽成天皇に讓り給うた時、先蹤を襲いで、良房の子右大臣基經に勅して、幼帝を輔佐して天下の政務を攝行させられた。爾來攝政は全く一の職名となつて、天子幼沖の場合には必ずこれを置き、御成年後は攝政を罷めて關白と稱するの例とし、そしてこれに任ぜられるものは外戚たる藤原氏に限られ、攝籙・攝家などと稱して、攝政は關白とともに藤原家に歸し、鎌倉時

應神天皇　第十五代。
万機　天下の政事。
推古天皇　第三十三代。
齊明天皇　第三十七代。
清和天皇　第五十六代。
貞觀　清和天皇の年號。（五五九—一五三六）
陽成天皇　第五十七代。
先蹤　先例。
輔佐　たすける。
爾來　それから。
外戚　天子の母方の親戚。

代以後は五攝家と呼んで、攝政の廻持をして近代に及び、明治天皇の御宇、二條齊敬が攝政となつたのが、臣下でこの職に就く終となつた。

大正十年十一月二十五日、皇太子裕仁親王が攝政に御就任遊ばされたのは、明治二十二年二月十一日に裁定された皇室典範の條規に據るものである。

聖上陛下の御不例は七千万國民の等しく憂慮に堪へないところであるが、東宮殿下の攝政御就任によつて、國家は泰山の安きに置かれ、國民は安堵の歡喜を覺えるのである。

二　ワーテルロー　バイロン

西暦一千八百十五年六月十八日のワーテルロー(Waterloo)の戰爭は、歴史上有名な決戰の一つである。イギリス軍とその同盟軍とは、英將ウェリントン(Wellington)公の指揮の下に、フランス軍を防いで、全くナポレオン(Napoleon)を覆して了つた。

戰の前夜、リッチモンド(Richmond)公爵夫人は、イギリスの將校やその妻女のた

五攝家　近衛・九條・二條・一條・鷹司。
御不例　御病氣。
憂慮　心配。
安堵　安心。
バイロン　英國の詩人。(1788—1824)
ワーテルロー　ベルギーの一村落。
ウェリントン　英國の將軍・政治家。(1769—1852)
ナポレオン　佛國皇帝。(1769—1821)

めに、ブリュッセル(Brusseles)で夜會を開いた。ウェリントン公は戰の切迫してゐることを知つてゐたけれど、用意周到な計畫が立ててあつたから、將校に勸めて夜會に出席させた。そして自分もまた暫くの間そこにゐた。思ふに、戰の切迫してゐることを隱さうとしたのだらう。

バイロン

イワーテルローの大戰は、世の歴史家・小說家・美術家・音樂家・詩人に深い興味を懷かせた。バイロン(Byron)のこの詩はその中でも特に傑出してゐる。樂しい舞踏室の光景は忽ち變じて「旗鼓堂々たる嚴しき陣容」となつた。しかし、作者の目的とするところは、戰爭の壯烈を描かうとするのではなくて、むしろその痛ましさ悲しさを寫さうとするのにある。

切迫　さしせまる。
周到　行屆く。
興味　おもしろみ。
傑出　すぐれて拔け出る。

さても夜のうたげの賑かさよ
ベルギーの都には今や遲しと
勇士美人とも〳〵集ひ寄りぬ
紅き燈は着飾れる人々の上に輝き
人々の胸は樂しき血潮の波を打つ
心躍らすごとき樂の音高く起り
笑を含める眼ざし互の歡を語り
悅樂の聲祝の鐘の如く堂を動かしし時
聞けや
重き響弔の鐘のごとく轟くぞよ

君聞かずやかの響を　否そは一陣の風ならん
あらずば石に軋る轍の音ならん
踊り續けよ朝まで眠らずにこの喜をな妨げそ

うたげ　さかもり。

若き時代と歡樂を驅り合ふ樂しき時は稀なれば
されど聞けや雲より響き返るがごとき
かの重き響はまたも轟きわたりぬ
前よりも益〻近く益〻明かに益〻恐ろしく
武裝せよ武裝せよそはそは大砲の轟なるぞ

あゝこの時こゝの狼狽はいかなりしよ
涙堰きあへず悲痛のをのゝき抑へ得で
一刻前に愛の讃美に輝きし
紅の頰は全く蒼ざめぬ
若き胸より命を裂き取るごとき遽しき別離と
またと有り得ぬ悲歎の叫ぞいとも痛ましき
樂しき夜はかくも恐ろしく明けたれば
また相見ることのあるべしとは誰か思ひ得ん

武裝に熱し狂ふ忙しさ
嘶く軍馬集れる軍隊轢轆たる砲車は
手早く戰鬪序列を整へて驀地に突き進みぬ
遠く殷々として轟く霹靂の響
近く耳を劈く鐘鼓の音に驚きて
兵はまだ明けやらぬ星の下に地を蹴て立ちぬ
入り乱れたる市民は戰き恐れて一語なく
蒼ざめたる唇もてたゞ敵は寄せ來ぬ敵は寄せ來ぬと囁くのみ
軍の過ぐる時アルデンヌの森の緑葉は
自然の涙に霑ひて波立ちぬ
そのさま若し生なきものも悲しまば
この往いて還らぬ勇士を悼むに似たり

あゝ痛ましいかなこの生ける幾千万の剛勇が
高き希望に熱して敵に押寄するも
遂に地に委して朽ち果つる時
今こそ脚下に茂れるも
やがてはその上を蔽ふに至るべき
かの夏草のごとくに
夕をも待たで踏みにじられんとは

昨の晝は元氣旺盛なる勇士を見
昨の夕は花の如き美人の前に得々たる人を見き
夜半ばにして戰爭の號砲を聞き
朝に金鐵の武裝となり
明けては旗鼓堂々たる嚴しき陣容となりにしに
あゝ

その陣容今いづこ
遂に黑雲捲き起り雷霆轟きて
騎士と騎馬　敵味方もろともに
一つ血潮の中に累々として葬られたるぞ痛ましき　（世界國民讀本）

橘　糸重子

三　ひとひ

涙なく悔なきひとひ若しあらばその夕暮に死なんとぞ思ふ　白岩艶子

杜甫の歌習はんよりは野に出でて草をしとねに雲雀を聞かん　若山喜志子

鳥鳴けば心のどけし青物の莖立つころのその鳥のこゑ　中原綾子

地異よりも天變よりもおそろしき人と人との魂のあらそひ

橘糸重子　東京音樂學校教授。
白岩艶子　白岩龍平の妻。
杜甫　唐の大詩人。
若山喜志子　若山牧水の妻。
中原綾子　中原斗一の妻。

やみふかき磯曲の道に行き暮れてたゞに悲しく聞く波の音　橋田あさ子

薄暗きとぼそに立ちて雞を呼ぶ我が手眞白し春のゆふぐれ　岡本かの子

四　神幸院

上加茂といふ洛外の淋しい里、そこに神幸院といふ寺があります。私はその山門を入つて、正玄関脇の客玄関に行きました。そこに中年の僧侶がゐて、左の奥の方にある池に近い室に案内してくれました。

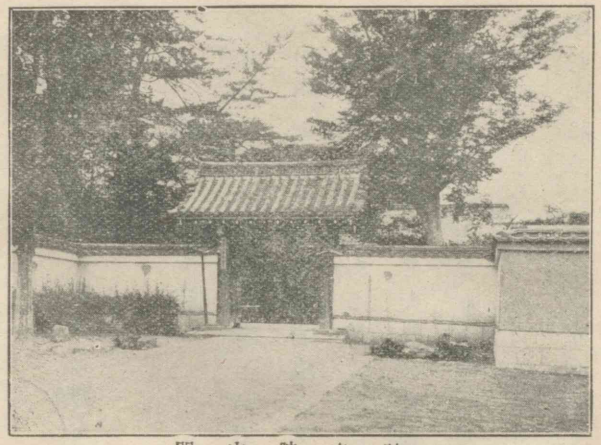
この寺院はさして大きい梵刹ではありません。私は歌人蓮月尼の住居として、この寺のあまり大きくないのがいゝことだつたと考へました。なぜなら、かうした整つたちんまりした、といふよりも、むしろ氣の毒なぐらゐに感じられる一貧寺の庫裡深く、眼に晩節を託して淡泊な生活を送つた蓮月尼その人を思ふ時、殊にその人の變化と生氣とに富んだ若々しさの籠つた

橋田あさ子　橋田東聲の妻。
岡本かの子　岡本一平の妻。
洛外　京都市外。
山門　寺の門。
梵刹　寺院。
蓮月　女流歌人、明治十八年歿、年八十五。
庫裡　寺院の臺所。
晩節　晩年。
淡泊　あつさり。

歌を思ふ時なんともいひ知れぬ懷かしさを覺えるではありませんか。殺伐だつた幕末の京都にも、なほ人間最高の靈想が、生きた一つの脈を搏つてゐたのだなと考へられます。

私はこの室で眞鍮の古い火鉢に手を翳しながらいろ〳〵と蓮月尼の遺物を見せて頂きました。尼が八十五歳でこの寺のお茶所の一室に終焉を告げる前に作つたといふ所謂最後の作品であるところの、秋草を描いた六つの茶碗と一つの急須とについて、「この茶碗はもと〳〵七箇あるべきでしたが、六つより作れずに歿せられました。」と、案内の僧は語りました。見れば、急須には、

咲きそめし千代の昔も行末の秋のかぎりもしら菊の花



神幸院山門

殺伐　荒々しいこと。
靈想　けだかい思想。
遺物　死後にのこつたもの。
終焉　いまは、最後、臨終。
歿す　死ぬ。

茶碗には、

あすも來て見んと思へば家苞に手折るも惜しき山ざくら花

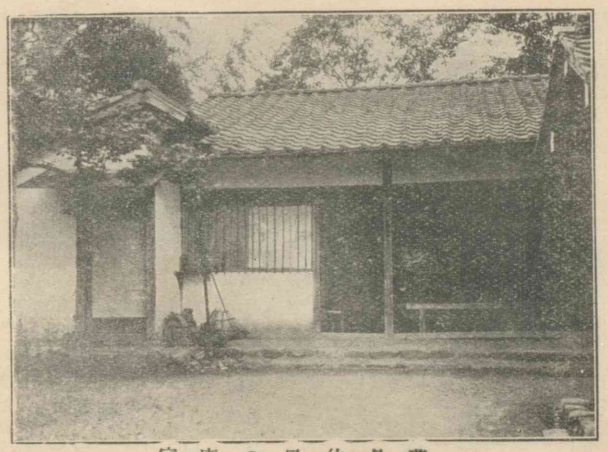
と書いてありました。絹糸を引いたやうな老尼の撓みのない歌文字や、その指紋の痕が、あり〳〵と殘つてゐるこれらの茶碗を見ると、私の眼前に、今にもこの歌比丘尼が生きて出て來るやうな心地がされるのでした。

をりしも留守だつた住持は京都から歸つて來ました。六十歳ばかりの老人で、鼠色の法衣の上に香染の袈裟を纏うて、懷かしさうな溫容を現し、そして二枚折の金屏風の前に、その枯淡な姿を落着けて坐りました。濃い墨と綠青と白綠との强い色で一ぱいに描きあげられた金屏風の松の繪、その燦びやかな屏風の前に、老いた淋しい老僧、そしてそこに陳べられた五十年前まで靜寂な歌生活をしてゐた尼の形見の寂びのついた品々、なんといふ深沈な趣致でせう。

私は間もなく蓮月尼が十年間住んで歿したといふお茶所に附いてゐる庵室に案内されました。このお茶所は本堂の南方、池を隔てた處にあります。

家苞　家へのみやげ。
住持　一寺の主たる僧。
香染　茶に黑みのある色。
溫容　おだやかなかたち。
枯淡　痩せてあつさりしてゐること。
趣致　おもむき。
庵室　小さい假の住家。

私は最初このお寺に來た時には、蓮月尼は寺院の中に住んでゐたのだらうと思つてゐましたので、この歌比丘尼の最終の生活を物語る唯一の記念物たる、この肝心な小さな古い建物を見遁してゐたのでした。



蓮月住居の庵室

お茶所は本當にお粗末な處です。東向で、間口四間に奥行四間の、だゞそれだけに過ぎない建物ですが、この四間四方の建物を正面から二つに仕切つて、向つて右の方がお茶所、左の方が蓮月の住所となつてゐたのです。お茶所の方は前の土間に鐵の釜がかけてあつて、そこに疊一枚ぐらゐの廣さのある臺が据ゑられてあります。案内の僧は「この臺は蓮月さんが拈りの陶器を作つて並べてゐたものださうです。」と語るのによつて、私はこんな

假初な物でも粗末には出來ない記念物だと感じました。土間の奥は二尺高の板敷で、四枚の扉を箝めた佛壇になつてゐます。「蓮月尼はこゝに持佛を祀つて、朝夕拜んでゐたさうです。」と、その僧が語りました。

土間から戸を開けて庵の中に入りました。疊が四枚敷いてあります。柱も梁も戸も眞黑に光つてゐました。僧は、「この建物は、御覽の通り、蓮月尼が住んでゐた當時そのまゝです。今は寺の老僕を住ませてゐますので、襖と疊だけは替へました。」と話しました。

私はその襖を開けて奥へ入つて見ました。この室は南向の五疊で、室の眞中には小さな爐が切つてあり、右側には一間の押入があります。柱でも障子の引手でも、實際故人が日夕手を觸れたものそのまゝだと思ひますと、私は禁じ得ない懷かしさを覺えました。冬などは、老尼はこの小さな爐に炬燵をして、乏しい灯の影でよく歌を作つてゐたといひます。

山畑の大ねの莖に霜さえて朝戸出さむし岡崎のさと

千鳥鳴く鴨川堤月更けてそでにおぼろの夜半の初霜

故人　死んだ人。

舷に風のつぶてと打ちつけて水には輕き玉あられかな

そんな寒い歌などもこゝで作つたのかも知れません。尼はこの五疊の室で、八十五歳で世を去つたのでした。

塵ばかり心にかゝるものもなし今日をかぎりの夕暮の空

それがこの人の辭世の歌です。いかにも水のやうに澄んだ、寂しい、淨い心持ではありませんか。

私はそれから南向の縁にいつて、そこの古い障子を開けて見ました。そこには荒れた小さな庭があつて、中ほどに一本の大きな梅の木が生えてゐました。老尼がこのいぶせき庵の縁に出て、夏の夕の涼風を入れてゐるさまなども想像されました。

暑かりし晝間のうさも忘れ水野中の月のかげのすゞしさ

さうした尼の歌なども思ひ出されるのでした。

左手の台所に出ようとするところは、二枚の障子で仕切られて、そこには古い丸行燈が置かれてあります。私はこの昔の形見のやうな時代めいたもの

辭世　この世を去ること。

いぶせし　きたない。

のを見つけて、奇異な思をしました。覗いて見ると、油皿には半分ばかり油が入れてあつて、燃えさしの燈心が二本ばかり浸つてゐました。これはこゝに寢泊りする老僕が毎晩點してゐるのだらうと思はれますが、蓮月尼もやはりこの行燈の乏しい灯の光を便りにして、歌を書いたり人の世や自然のことを思つてゐたのでせう。そこには疊が三枚敷かれてあつて、三尺に一間の土間が殘されてあり、土間の障子を開けると表に出るやうになつてゐます。

この庵にはたゞ上記の三室の外には何もありません。これで見ても、老尼はいかに佗しく、いかに乏しさに甘んじて、歌生涯をこゝに終へたかを知ることが出來ようと思ひます。

私は間もなくこの寺を辭して、賀茂川堤を京都の方へ引還しました。（女　性）

五　男女の分業

野上俊夫

男子と女子とはその身体に於ても、その精神に於ても、大なる差異があつて、

佗し　つまらない。

辭す　暇乞する。

野上俊夫　文學博士、京都帝國大學教授。

結局男子は外に出て働き、女子は内に在つて働くやうに出來てゐることは疑はれない。女子の最大任務は、己の後繼者たるべき子女を生み、出來るだけこれを完全圓滿に發達させて、次代を己等の時代よりも一層優れたものにすることである。隨つて、生存競爭場裡に活躍するのに必要な腕力や智力は、比較的男子より劣つてゐるけれども、一方に、將來の後繼者を育てるのに必要な尊い濃かな愛情を豐かに賦與されてゐるから、この點に於ては到底男子の追從を許さない。

これに反して、男子は主として優勝劣敗の生存競爭場裡に馳驅して、己の生活を向上增進させ、同時に己及び妻子の生命を保護し、食物その他必要な品を獲得するのを本務としてゐるから、子女養育の任務に對しては、女子に比して著しく不適當なことを免れない。これを概言すれば、男子は現在のために生き、女子は將來のために生きるといふことが出來る。これは男女自然の分業であるから、男子と女子とはいづれが尊くいづれが卑しいといふべきでない。たゞ仕事の種類が異るために、心身活動の有樣が相違してゐ

結局　つまり。
後繼者　あとをつぐ人。
活躍　いきゝと働く。
賦與　分け與へる。
馳驅　はせまはる。

るのに過ぎないのである。

しかし、女子だからとて必ずしも悉く結婚するものでなく、結婚しない女子の數は文化の進歩とともに次第に增加する傾向さへある。この傾向の決して喜ぶべきでないことは言ふまでもないけれども、とにかく現在に於ては、年々女子獨身者の數の多くなるのが文化國の一般の狀況である。更にまた、結婚した女子が悉く子を生むとも限らず、その出產率もまた文化の進歩とともに次第に減少する傾向がある。たゞし、大体からいへば、此等のことは勿論少數の除外例たるに止るのであつて、女子の大部分はやはり相當の年齡に於て結婚し、そして結婚したものの大部分はやはり子を生むのが事實であるから、少數の除外例を以て多數を律すべきでないのはいふまでもない。

前述の如く、女子は將來の子孫のために生きるものであるとし、子を生み子を育てることが女子の大切な任務であるとするならば、女子はこの大任務遂行のために、その心身の精力の大部分を傾け盡すのであるから、たとひ他

傾向　かたむき。
狀況　ありさま。
出產率　子を產む步合。
除外例　例外。
遂行　しとげる。

の方面に於て男子に及ばないにしても、それは當然過ぎるほどの當然であつて、決して恥辱ではない。姙娠十箇月の間、女子の心身には種々な故障や變化が起つて、到底男子と同樣に十分な活動をすることは出來ない。また出產後一箇年間は、授乳や大小便の世話などで、殆ど日もこれ足りない觀がある。それから、子供が次第に成長して、間斷なく活動し廻るやうになれば、全く目を離す暇もなく、更に四五歳以上になれば、その發育して來る知識を開發するために、非常に努力せねばならない。たゞ一人の子供に對してさへさうである。まして二三年おきに一人づゝ子を生むとすれば、それらの子供を完全に育てるのには、その全精力を傾け盡しても足りないぐらゐである。隨つて、女子が男子と同樣に世間に出て活動することは到底出來るものでない。若し女子が一方に於て育兒の大業をやりながら、他方に於て男子同樣な世間的活動が出來るとすれば、女子は男子に比して著しく優れた人間であるわけで、到底男女が同權で社會を作ることは出來ず、男子は悉く女子の奴隷となつてしまはねばならないやうになるだらう。

姙娠（にんしん）　授乳（じゅにゅう）　子に乳をのませること。　間斷（かんだん）　たえま。

此の如く觀じ來れば、女子が男子のやうに世間的に活動することが出來ないでも、それは決して女子の不名譽ではない。女子が男子には到底出來ないところの子女養育の大任務を有するがためにさうなつてゐるのである。即ち男女の心身にかゝる根本的の分業があるからである。隨つて、その分業によつて男女がそれ〴〵己に最も適した仕事をするのが、兩者各自の幸福にもなり、やがてまた社會全般の利益にもなるのである。

勿論この點に於ても例外は多いから、女子でも、獨身のもの、或は結婚しても餘力のあるものは、男子と同樣に、或は男子以上に、知能をも磨き、世間的活動をもし、その才能のあるものは、出來るだけこれを助長發揮するがよい。しかし、それはあくまでも例外に過ぎないことで、その女子自身にとつても、それが果して最も大なる幸福であるかどうかは疑問である。

六　窓邊の春

生田春月

窓邊の柳ははやも芽ぐみ　そよ風ほのかに春を告ぐる

發揮（はっき）　あらはす。

生田春月　名は清平、鳥取縣の人、明治二十五年生。文學者。

あゝ故郷はいかになりし　我が父母はいかにおはす
遙けき都にひとり住みて　あけくれ書には眼をそゝげど
おもひは通ふあゝ故郷　その故郷なつかしの家

新制 女子國語讀本 卷八 終

同字一覽

〔こゝに同字といふのは、一般に略字・俗字・訛字・同字・慣用字などといつてゐるもの一切を包括したものである。＊印の附けてあるのは、元來別字であるが、今日は同字として廣く用ひられてゐるものである。〕

| | | |

肅 戸 聽 聯 聲 耻 羨 羹 群 羨*羯 罰 繩 絹 縱 糸*綯 帝 裾 総 網
婿 羹 岩 惣

肅 聲 聽 聯 堺 恥 羹 羹 羣 羨 羯 罰 繩 絹 繼 絲 褌 紙 裾 總 綱

蕚 崩 葬 蔭 荒 花 舩 鮠 豔 舍 舘 舗 台*致 卧 脳 胄*胸 膝 腸 脈
豔 舘 蜚

蕚 萌 莽 蔭 荒 華 船 豔 舍 館 舗 臺 致 臥 脳 胄 胸 膝 腸 脈

蝇 蚕 蠶*蛎 虫*蟻 蝗 虱 蚩 蛩 虜 虜 虛 虛 處 處 肩 戸 菅 蓉 蘂 蓋
蠶 虛 虜

蝿 蠶 蠶 蝋 蟲 蟲 蟷 蝨 蚊 蛩 虜 虛 處 虎 蘆 葛 蓉 蘇 蘆 蓋

謂*諛 諛 覆 証*謚 詑*儺 讖 托*記 觧 規 覧 覇 面*衿 衽 裡 衛
解 謂

諂 諛 讀 護 證 謚 詑 讐 讖 託 記 解 規 覽 霸 西 襟 衽 裏 衛

聿 軌 輙 躬 蹟 蹣 鄒 貪 負 頼 質 贄 犯 豹 象 豊*讃 諛 訳
軀 迩

輩 軌 輒 軀 躬 跡 蹣 湊 貪 負 頼 質 贄 犯 豹 象 豊 讃 諛 譯

釈 采*配 医 隣 郷 郎 撰*逆 逸 辿*辺 迂 逓 過 達 辰 弁 辨 辭
竪 辺 遷 辨

釋 采 配 醫 鄰 鄕 郎 選 逆 逸 辿 遷 遞 過 達 辰 辯 辨 辭

雞 襍 目 厂 隘 陰 隙 隔 隘 関 閑 間 鑒 戔 錆 鉾 鎧 鉄 針 釜
雜 蝋 雁 鐵

鷄 雜 雖 隔 陀 陰 隙 隔 陷 関 關 閒 鑑 錢 鏽 矛 鎖 鐵 鍼 釜
鐵

鍔 臭 欝 鬪 髮 駅 駈 駄 馬 餐 余 顛 頭 类 願 鈴 青 天 隷
驅 靈

鱲 魚 鬱 鬪 鬚 驛 驢 驅 駄 馬 餐 餘 顛 顯 類 頤 韻 青 靈 隷

龟 齢 齒 斎 斉 荒 黒 皆 黄 麥 麺 麦 廉 廉 鶴 鵜 鳥 鳥
龍

龜 龍 齡 齒 齋 斉 鼠 鼓 昆 黄 麻 麹 麥 麗 麁 鹿 鶴 鷺 烏 鳥

御 徑 微 往 彦 彝 霙 弯 弥 強 菴 廩 嵩 崖 峯 戟 岳 屡 属
徑 彌 强 岩 嶋 峰 巖 崖 嶽 屢 屬

御 徑 微 往 彦 彝 彙 彎 彌 彊 庵 廩 巖 崖 嶽 嶽 屢 屬

拘 戯 戟 恋 悔 悅 懷 応 愁 慮 慰 恒*慙 慍 志 忘 従 懼 彿 彷
戲 戲 慰 慰 慰

別字一覽

左の文字は全然別字である。＊印を附けた文字は今日同字として廣く用ひられてゐる。

＊亙わたる
＊体あらい
＊但たゞし
＊僭みだり
刃やいば
叉こまぬく
＊去逆ちふ 産む
支うつ
壬ぬきでる
刋きる
＊協おびやかす
＊四よつ
糸細い糸
＊串うがつ
＊辛からい
育むなさき
＊冑かぶと
＊兎ゆるす

亘桓に同じい
體からだ
但拙い
僭身分を越えておごる
刃きず
叉爪の古字
云いふ
支えだ さゝふ
壬みづのえ
刊けづる
協かなふ
四あみ
系つぐ
串くし
辛つみ
冒めくら
冑よつぎ
兎うさぎ

＊屆あな
易かはる
刺そしる
＊糾あざなふ
＊台星の名。敬語に用ひる
壺つぼ
＊糸細い糸
＊頤おとがひ
＊賣うる
彊つよい
錬くさび
＊穀かされごろも
＊月つき
＊欹なげく
＊虫まむし
傳かしづく
＊椽たすけ
登たかつき

屆とゞく
易陽の古字
刺もとる
糾告げる
臺うてな
壺みち
絲いと
頤おとがひ
賣てらふ
疆さかひ
錬きたふ
穀けがれる
月肉づき
攲そばだつ
蟲むし
傳つたへる
椽たるき
登のぼる

＊面おほふ
＊詫あざむく
＊詔へつらふ
＊証いさめる
＊豐禮の古字
＊迄まで
蚌みづち
＊妹いもうと
門かど
＊劵わりふ
＊姫つゝしむ
＊托おす
＊担はらふ
＊改神の名
＊負おふ
苗なへ
段きれ
欠あくび

西にし
詫あざむく
詔うたがふ
證あかし しるし
豐ゆたか
迄行く
蚌おたまじ やくし
妹嬉（人の名）
門たゝかふ
劵つかれる
姫ひめ
託たのむ
擔になふ
改あらためる
負神の名
苗あじか
段かり
缺かく

＊冠かんむり
＊槍やり
浙江の名
陜せばい
徘たはむれ
＊後ゴのち、うしろ、あと
班わかつ
訴欣に同じい
商あきなふ
祇地の神
＊羨地名
鍛きたへる
藉席
＊選えらぶ
卻ひま
＊塚ちり
毋なかれ
已おのれ

寇あだ
鎗の形容
浙米なと
陜（陜西）
后きみ
斑まだら
訴うつたへる
商もと
祇つゝしむ
羨うらやむ
鍛かぶと
籍書
撰書物を編
卻しりぞく
塚つか
毋つらぬく 母はゝ
已すでに
已み

新制女子國語讀本 定價

卷一——四	金四拾參錢
卷五——十	金四拾錢

大正十三年度寫埒定價

金七拾七錢	
金七拾二錢	

大正十一年十月二十七日印刷
大正十一年十月三十日發行
大正十二年一月四日訂正再版印刷
大正十二年一月七日訂正再版發行

著作權所有

定價金壹圓貳拾七錢

著作者 東京開成館編輯所
東京市小石川區小日向水道町八十四番地

發行兼印刷者 株式會社 東京開成館
代表者 渡邊良助

發行所 東京市小石川區小日向水道町八四
振替貯金口座東京第五參貳貳番 株式會社 東京開成館

大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角
西部販賣所 三木佐助

東京市日本橋區數寄屋町九番地
東部販賣所 林平次郎

15

年口組

田坂ミサコ